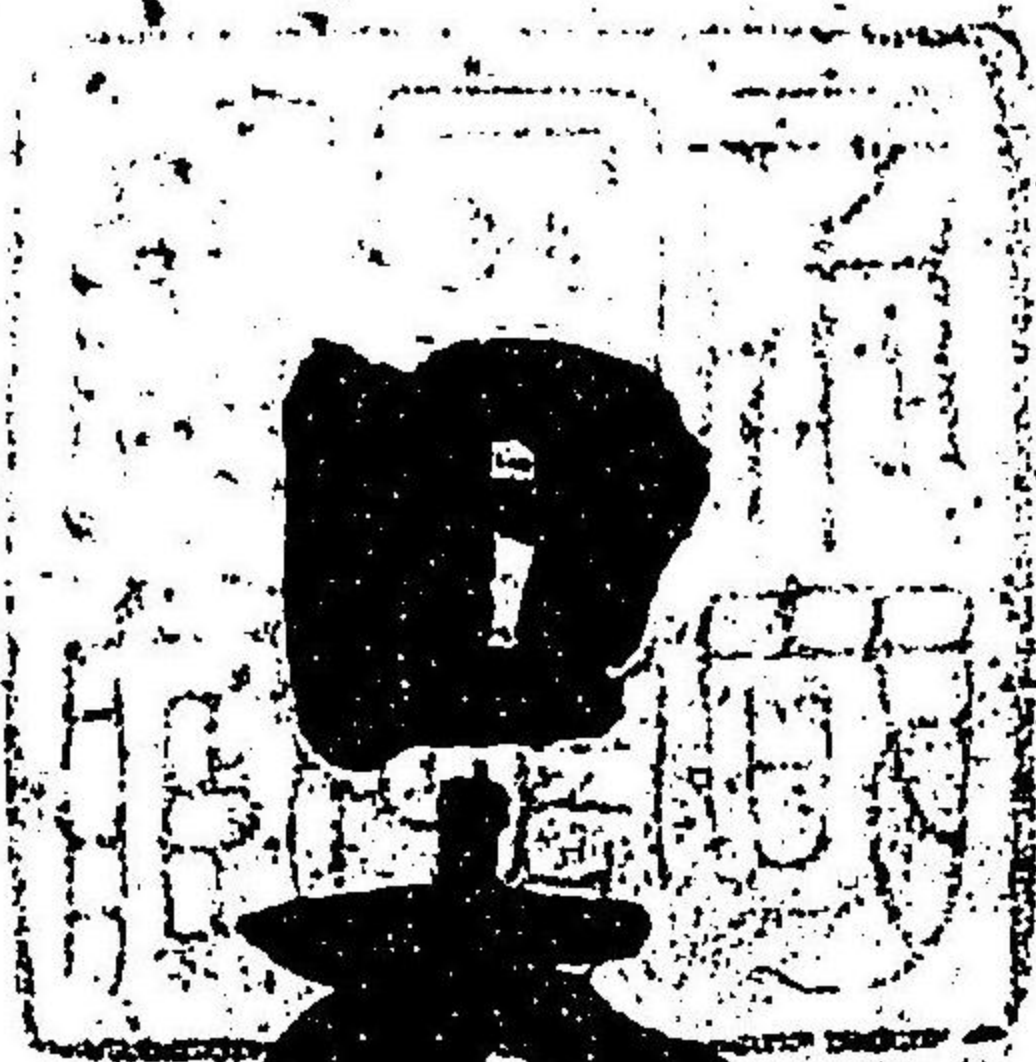


71215

528-214



日本風景新論

明治
43. 4. 7
内交

自序

卷末に「結論」一章あり、是れ結論なりと雖も、亦、解題の性質を帯ばざるにあらず、故に、或は之を始めに讀むを可とす。

念の爲め、「結論」中の或る要點を擧げて序に代へ、以て、本書を讀まんとする人の參考となさん。

予は、日本の風景は火成岩の露出に在り、火成岩に對する流水の浸蝕に在りと云ふが如き、怪奇を尙ぶ議論に反對せり。

水蒸氣と日本の風景との關係も、予は、水蒸氣の特に濃厚なるが故に日本の風景は極美なりとの説を取らず、日本の風景と日本の水蒸氣とは、相俟つて特殊の美を成すべく、共に或る適

度を保てるを認め、進んで、水蒸氣の作用なる霞（普通に従つて此字を用ふ）と朧とは、春夏秋冬常に在るものなるを指示せり。

富士山に對しても、舊式なる盲目的讚美を厭ひ、相當の根據に立ちて、忌憚無く之を褒貶せり。

書中最も斬新なる題目は、海流の移動と東北地方の風景との關係也、未だ、學者其他何人も之に着手したるを聞かず。

其他、盡く予だけの議論をなせり。

敢て自ら新論と命題す、其實案外の舊論なるやも知らず、さりとして、巢鴨病院内の某患者が、自ら世界統一を策し得たりとなすの滑稽程には、滑稽ならざるべきを信ずる也。

明治四十三年三月

銀月識

日本風景新論目次

◎綠素と白素

- 其一 日本風景の美なる所以……………一
- 其二 日本と松との關係……………二
- 其三 日本風景の要素としての松……………一〇
- 其四 日本と櫻との關係……………一四
- 其五 櫻及び松と國民性との關係……………二〇
- 其六 櫻と其保姆兼醫師……………二六
- 其七 日本風景と杉……………三三

◎日本の風景の特に尙ぶべき點

- 其一 日本風景の特に尙ぶべき點は普通に云ふ所のそれの外にあり……………四

其二 特に日本にのみ限れる風景……………四
 其三 霞及朧を論ず……………五〇
 其四 霞と風景との關係の一例……………六〇

◎太平洋岸と日本海岸……………六六

其一 兩面の地理的作用……………六六
 其二 太平洋岸と日本海岸との差違は最も風景に於て著るし……………七〇
 其三 太平洋岸の特色……………七一
 其四 日本海岸の特色……………七四
 其五 太平洋岸と日本海岸との風景の概念……………七七

◎風景としての富士の眞價……………八二

其一 風景としての富士山と日本人……………八二
 其二 日本國土と富士山との地理的關係……………九一
 其三 風景としての富士山の眞價(上)……………九七
 其四 風景としての富士山の眞價(中)……………一〇四

◎湖沼觀の日本……………一一三

其一 日本の湖沼觀……………一一三
 其二 琵琶湖と其死活問題……………一二四
 其三 日本の湖沼中特殊の趣致を有せるもの……………一二四
 其四 日本の瑞西と日本のヘニス……………一三九
 其五 瀬戸内海觀(イ)……………一四二
 其六 瀬戸内海觀(ロ)……………一四七
 其七 瀬戸内海觀(ハ)……………一五七
 其八 瀬戸内海觀(ニ)……………一六六
 其九 更に一步を進めん……………一七四

◎日本一の好風景——山嶽美と海洋美との一致……………一七五

其一 日本の山嶽美と海洋美……………一七五

其二 日本一の好景に接しての感想……………一八三

◎松島の價值……………一九三

其一 概括せる松島は俗的趣致……………一九三

其二 松島に限れる深き趣味……………一九六

◎巖石の奇……………二〇三

其一 奇巖怪石の風景の價值……………二〇三

其二 日本に於ける奇巖怪石の風景の概要……………二〇三

其三 日本に於ける最も雄大にして且つ怪奇なる風景……………二〇三

其四 日本に於て一時奇巖怪石の風景の最も尊重せられし理由……………二〇四

◎喬木美の日本……………二一九

其一 老木大樹の價值……………二一九

其二 憂慮すべき傾向……………二二三

其三 予が觀たる喬木美……………二四〇

◎櫻花國と梅花國……………二五七

其一 日本には何故に梅多きや……………二五七

其二 梅花と國民の氣質……………二六〇

其三 梅花の趣致……………二六三

◎潮流の變調と日本の風景……………二六九

其一 風景の變化する場合……………二六九

其二 日本に於ける潮流の移動……………二七三

其三 潮流の移動と風景との關係……………二七三

◎日本の風景と國民性……………二八六

其一 風景と氣風との關係の有無……………二八六

其二 風景と氣風との關係の例證……………二八九

其三 風景に感化されたる日本人の氣風……………二九四

其四 風景の感化の利弊と其受用……………二六

其五 日本に雄大なる風景無し……………三〇

其六 雄大なる風景とは何ぞや……………三四

其七 外に出で、雄大なる風景に接すべき日本人の必要……………三七

◎日本風景八十一品……………三〇

其一 春二十七品……………三〇

其二 夏二十一品……………三〇

其三 秋二十品……………三三

其四 冬十三品……………三四

◎東京及び東京附近の風景の或る一致……………三五

其一 趣味ある研究問題……………三五

其二 上古よりの地理的變遷……………三五

其三 鶏助的風景……………三五

其四 予が趣味を感せし事……………三六

◎結論……………三六

其一 予は敢て日本の風景を論じたり……………三六

其二 記憶を参考となす……………三七

表紙を故らに白くなし置き
たるは購讀者各自の記入に
任せんが故也若し著者に此
書を携へ行き若しくは郵券
十二錢を封入郵送せば喜ん
で肉筆を以て之に題したる
上返送すべけん

日本風景新論

伊藤銀月

◎綠素と白素

其一 日本風景の美なる所以

日本の風景の美なる所以を尋ねて、國土の位置、氣象上の作用、土壌岩石の性質等を問題とするも亦可なれど、要するに空漠たる議論に歸せざるを得ず、而も、是等の問題は、大抵陳腐なるを免れずとなす、勿論、是等の問題も亦予が日本風景論に參酌されざるにあらずと雖も、議論の根底に至つては別に予一己の造りたるもの也。先づ、日本の風景の特に美なるは何に由れりやとの問題を解釋すべく、最も明白なる材料に依つて説を立てんに

特に日本に於ける風景の要素をなすものは、松の緑色と櫻の白色となり

と云はざるを得ざる也。

其二 日本と松との關係

日本と松との關係より述べん、臺灣と北海道とを除きたる舊來の日本國土に就いて之を見るに、樹木の豊富にして其種類夥多なること、他の文明諸國に比べて世界第一なりと稱せらるゝが中にも最も其數多く、其勢盛に、其分布區域の廣きは松なりとなす。

松には、赤松(雌松)、黒松(雄松)との二種ありて、植物學上松栢科に屬す、其兩種共に相俟つて我が國土の美觀をなせるは

磯で曲り松、湊で女松中の祝町や男松

てふ、常陸海濱の俗謠に依つても之を證することを得べし。

而も其兩種の松の分布區域を大別するときは、赤松は九州の南部

より北海道の南部に迄至りて、温帯より寒帯に連なり、日本に於ける針葉樹中、最も其分布區域の廣きものは是れなるが、山陰、山陽、四國、畿内、武藏、兩毛、信濃、岩代、陸前、陸中等に於て、就中十分なる發育を示し、丘陵地及び平原地に天然林をなし、亦、是等の地の至る所、其人造林に富めり、かの

武夫の矢並つくらふ小手の上に覆たばしる那須の篠原

と鎌倉の右大臣に詠せられし下野の那須野は、其篠原の篠の中に立てる木の重なるもの皆赤松にて、今なほ黒磯附近の御料林たる未開の野を歩まじ、廣野の風景に赤松の林の缺くべからざるものなるを會得すべく、是れ實に、日本に於ける赤松の天然林の好個標本なる也、又

山里は松の音のみ聞きなれて風吹かぬ日は淋しかりけり

と風流尼蓮月が歌ひし京都附近の山地は、殆んど赤松の林に依つて其風景が形造らるゝと云ふも過言にあらず、山嶺丘陵を温雅にして

秀潤ならしむるもの、主としてこれならざるは無き也、されば
蒲團着て寝たる姿や東山

の寝たる姿を成就するもの亦此赤松の相依り相並べる作用に外なら
ずして、獨り東山のみに限らず、西山も北山も皆此趣あり、殊に、
金閣寺の庭より望む衣笠山、兼好法師の双ヶ岡など、小なるだけそ
れだけ蒲團着て寝たる姿に於て優れるを覺ゆ、而して、これ等はす
べて赤松の人造林にてある也。

赤松は樹性陽向の乾燥地に適し、而も、他の樹木を壓倒して獨り
繁榮するにはあらず、他の樹木の生育すること能はざる瘠地に於て、
獨り能く長大の發達をなし、直徑五尺、高さ百尺以上に至る、矯々
たる秀姿ながらも、温雅淑圓の女性的本色を失はざるを此松となす。
扱て次には黒松なるが、其分布區域は、九州の南部より三陸兩羽
地方に連なりて、主として海濱に生じ、日本海岸、太平洋岸共に之
を見ざるの地ある無く、殆んど、海岸線を追うて日本を包擁するの

赤松の特色

黒松

概あり、就中山陽及び九州の海濱を最となす、而して、これには天
然林よりも人工林多く、其故は、此樹更に赤松よりも乾燥の瘠地に
堪へ、他の樹木にては吸収すべき養分無しとする所の砂地にて、
岩石の上にて、能く高齡を保ちて長大の發達を遂ぐるのみならず、
潮風の吹き及ぶ所、即ち海上の氣象の直接に影響する所に於ては、
其勢最も盛にして、海に遠さかるに随つて之を減するものなれば、
飛砂を遏め海風を防いで、村落、市邑及び行旅の爲めにするの必要
より、栽え立てをなしたるにてある也、されば

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ
と歌聖人麿に詠せられしは、獨り明石の浦に特殊なる景色風物のみ
にあらずして、山陽海濱到る所に此趣致を見出だし得べきが、それ
とて、歌其物の單獨の價値を以て千古の絶唱と稱せらるゝにあらず、
此歌を朗唱すると共に、松多き山陽海濱が聯想せられ、水蒸氣多量な
る瀬戸内の風景と、霧を籠めたる濃淡幾重の松との調和が、殊に宜し

きを覺ゆれば也、又

田子の浦に打出で、見れば白妙の富士の高根に雪は降りつゝ、
の歌に代表せらるゝ駿河海濱の風景も、山の白と海の青と松の緑と
三者の對照の上に形造らるゝにて、三保の松原も田子の浦も松あり
ての名所なる也、此二首の歌は松を云はずして松を含めり、松を云
はざるは、云はずとも人皆知れるが故にして、云はざるは云ふより
も更に重きを置けるが故也、故に、是等の歌にして若し外國語に譯
せられ、能く原文の風韻を害せざるを得べしとするも、日本の海濱
と松との關係を知らざる外國人に之を讀ましめば、以て、何等の感
興を引かざる駄作となすべけん、更に

松島やあゝ松島や松島や

と芭蕉が叫びたるを見よ、若し、松島は松を戴きたる數百の小島が
海上に散布せる所なりてふ概念にして、日本人共通のものならざり
せば、如何に俳諧のオーソリチーたる芭蕉が、聲を枯らして「松島

や」を百千萬重ねたりとて、俳句にも狂句にも醉にも蒔藪にもなる
べきにあらざる也、白砂青松（眞の白砂青松は山陽海濱のみにして、
其他は寧ろ灰砂青松と云ふべき事實なりと雖も、左様に細かき穿鑿
をせず、總括して白砂青松の部類となさん）の海濱の景、並びに
巖上に偃蹇たる老松の致は、苟くも、本州及び四國、九州、其他之
に附屬せる嶋嶼に於ては、何れの部分にても之を見ることがと得べき
を以て、必ずしも、須磨、明石に行かず、三保の松原、田子の浦に
至らず、松嶋及び天の橋立を訪はざる者と雖も、亦其概略を推測し
得るだけに、平生日本人の趣味は訓練せられつゝあるなれ、若し夫
れ、木田道灌の

我庵は松原ついき海近く富士の高根を軒端にぞ見る

に至つては、直ちに是れ日本的風景の神髓をたゞき得たるの響にし
て、或一面より之を見るときは、松に對する讚美の聲とも解し得べ
き也、なほ、予をして

磯で名所は大洗様よ松が見えすはのどと

の俗謡を擧げしめよ、是れ人麿が明石の浦の和歌を露骨ならしめて、之を他の方面に應用したるものにて、日本の海濱と松との美的關係が、俗謡に迄も入る程それ程顯著に、はのどと海霧の間に隠見する所の趣致は、目に一丁字無き漁郎蚤婦にも鑑賞せらるゝ程、それ程普遍的に日本人を美育し得たるを知るべしとなす。

別けて黒松は、蛟龍の蟠屈し飛騰するが如き雄姿奇態に富み、而も、赤松より更に高齢に堪へ、更に長大を致すを以て、最も傑出せるは、直徑六尺、高さ百三十尺に及ぶあり、随つて、高砂の松、尾上の松、曾根の松、唐崎の松、汐越の松等、至る所の名松は皆此種也、是等の松が如何に日本人に賞觀せられしか、亦賞觀せられつゝあるかは

誰をかも知る人にせん高砂の松も昔の友ならなくに
夜もすがら嵐に波を運ばせて月を垂れけり汐越の松

黒松の特色

の和歌、及び

唐崎の松は花より臙にて

の俳句等に依りて、其一端を知ることを得べし。

但し、右に擧げたる中、北陸に在る汐越の松てふものは、予の未だ至り見ざる所にして、今なほ存せりや否やをも知らずと雖も、歌の面白き故記憶に留まれる儘擧げたるものなるが、其他は皆一見を経たり、高砂、尾上、曾根等は、古への歌に入りしそれよりは二三代の子孫なりと聞けど、なほ皆雄大秀拔なるもの也、尤も、こゝに擧げたるものに限らず、すべて名松てふものは、一樹獨立して人為的に囚はれの姿となり、周囲と調和せずして、風景としては感心し難く、寧ろ、目出度しとか何とか云ふ俗的趣味の範圍に屬するものたるを免れざるが如しと雖も、之を目して

日本國土の美觀の要素をなす物の見本が、所々に展覽されつゝあるもの

となさば、亦其存在の有意義なるを信ずるを得べき也。

10

其三 日本風景の要素としての松

日本國土と松との關係は、之を實利上より見るも、國土を保全する點に於て、此の如く有力なる植物は無き也、近畿、東海、山陽等に見ること少なからざる老朽せる赭色の禿山も、之に松を植ゆるときは、以て綠髮氈々たる青年の山に復せしむることを得べく、山の血肉墮落して土砂を流下し、防砂工事を施すの必要ある所にも、植ゆるに松を以てすれば、能く生育繁盛して其災害を防ぎ得べく、又、前にも述べし如く、海濱の砂地に之を植えて、人家、田園、行人の爲めに潮風飛砂を凌ぐの利あり、總じて、未だ草木を生せざると既に荒廢に歸せしとの別無く、不毛の地に樹林を形造るべく松に過ぎたるものあらずとなす。

されど、實利上の事は本書の問題外なれば、深く之を探究するの

日本風景の要素としての松

要無し、予は唯だ、如何程松が實利上有力なるかの度を知らしむべき材料として之を擧げたるのみ、實に、個程迄實利上有力なる松も、之を其風致上の價値に比べては云ふに足らざる也、若し之れ無きときは、日本の國土は十分に保全せられずして、所々に砂漠と赭色の禿山とを見るべき程、それ程實利上有力なる松なりと雖も、なほ之を日本の風景が世界に於て最も優秀なりとせらるゝ所以の重要素を成す、風致上の價値には比べ得べからざる也、實に

其數量に於て、其位置に於て、其形態に於て、其色彩に於て、松は不斷に日本の風景を組織し及び修補する所の重要素

にてある也、極端に云へば

日本の國土は、松あるを以て能く綠なるを得と云ふも、亦當らざるにあらず

何となれば、他の樹木は扱て置き、草さへ満足に生せざる荒土瘠地と雖も、日本に於ては、皆松が之を綠にする故に美觀を成す、故に

松を以て、日本の風景の基本たる緑素となす。

赤松、黒松各々其所に叶うて特殊の美を成すと雖も、其色、其形、其影、其聲、其香の五美を兼有せる點に於ては、共に一にして、何れの樹木も之に匹敵するを得ず、たゞ、其餘りに普遍的にして、趣味の高き者も低き者も一樣に之を愛玩し、動もすれば、人工の下に俗悪化せしめらるゝのみならず、亦、詩文の俗悪なるもの、繪畫の俗悪なるものに傷けらるゝ場合多きを以て、一面より之を見れば

松と云へば、直ちに俗悪なる趣味を聯想せらるゝ事情

あるを免れざる如き也、なほ、日本人に描かるゝ西洋畫は、未だ彼れの粉本を模寫するの域を脱すること能はざるを以て、松の美を描くことも亦未だ研究を経ず、爲めに、少しく名ある者は松を描くことを避けて、同じ西洋畫にても、見世物の看板の如き俗悪なるそれのみ、臆面無く描かるゝが故に、松は、西洋畫の爲めにも俗悪なる趣味のものと誣ゑらるゝに至りたり。

されど、浮雲月を蔽ふと雖も、月其物の本體には何等の影響あらざる如く、俗悪なる者自ら強めて松と稱する形象に依つて、己れの俗悪を表するのみ、如何に歌はれ描かると雖も、松それ自身の毫も關知する所にあらざる也。

松の五美の中、予は最も其影の美を愛す、かの、劍舞に用ひられて人口に膾炙する

殘月滴露濕人袂、曉風吹面覺秋冷、忽驚大蛇當途橫、拔劍欲斬老松影

の詩の誇大に失するは妙ならずと雖も、月夜に松並木の間を歩みて、地に横ふ千條の黒蛇を踏み過ぐるの興趣、亦棄つべきにあらず、而も、これより更に好しとするは、其角が

明月や壘の上に松の影

の風致也、されど、嘗つて松島に遊びしの夜、月に乘じ舟を戯うて雄嶋に渡り、絶えて人無きの幽徑に、參差たる松影を踏みつゝ、呬

くに似たる緩き波音を夢心地に聞きなして、寂寞たる座禪堂に向ひ、
晝に見し群島の大觀よりも、此局部の小景より得たる趣致を優れり
となし

今宵われ雄島の松に身を寄せて泣きぬと波よ人に語りそ
と歌ひしこそ忘れ難けれ。

其四 日本と櫻との關係

既に、日本の風景の基本たる綠素に就いて言を爲しぬ、此に於て
進んで

綠素に配する白素

に論歩を進めんとす。

云ふ迄も無く

松の綠素と相對して、日本の風景を形造るべき重要なる地位を
占むる所の白素は、櫻なり

とせざるべからず、或意味に於て、松を日本の風景の骨髄となせば、
櫻は實に其血肉にてある也。

松は、時の制限を受けずして、常に日本の風景の基本をなすと雖
も、而も其最も精采を發揮するは、櫻と相俟つ所の晩春に於て也、
實に、櫻が其花の一時に於て全日本を白盡するの趣は

此様な末世を櫻だらけ哉

てふ一茶の俳句にも表せられ、一時的なるだけそれだけ、松の常住
不斷なるに比して感興を引くこと強く、加之、松は日本の特産物と
云ふにあらずして、支那の如きも亦松に富みて而も之に重きを置く
こと、肯て日本に劣らざるに、獨り、花として觀るべきの櫻は日本
の特有と云ふべく、且つ夫れ、至る所其天然林と人造林と相映じ相
連なりて、全國之を見ざるの地無く、花時の外は特に人目を引かさ
るを以て、甚だ其數の多きを覺えずと雖も、其花一たび開いて、滿
樹を包むに、雪とも雲とも形容の段にあらざる絶高絶美の白色を以

てするや、恰も、日本全國櫻花の外に何も無きが如き觀を呈するに至る也、敢て問ふ

日本の國土は櫻花の時季程美裝せらるゝ時ありや、世界何れの所にか、櫻花の時季に於ける日本の國土程絶美なる地ありやと、實に櫻は日本の國花にてある也。

櫻と日本國の土質及び日本人の氣風との關係は
敷島の大和心を人間は、朝日に匂ふ山櫻かな

と云ふが如く、單に詩歌的に詠歎すべきものなるのみならずして、亦科學的に之を研究し證明するを得べき也、予は嘗つて

櫻花進化論

を唱へたり、其要旨に曰く、櫻は元來日本特有の樹木にあらずして、對隣の支那にもこれあれば、歐米諸國にも亦無きにあらず、否、歐米諸國は寧ろ盛に之を栽培し、支那も亦久しき以前より此樹の存在を認めつゝあり、されど、歐米諸國が此樹を栽培するは、其實を採

らんが爲めにして、其花を觀んが爲めにあらず、支那も亦爾る也、櫻を以て其花の觀るべきものなるが故に存在せしむべしとするの國は

世界に於て唯だ日本ある

のみ、知るべし、日本の地味氣候は、最も櫻をして實の樹たらしめずして花の木たらしむるに適し、加之、日本人の趣味嗜好も亦最も櫻をして實の樹たらしめずして花の木たらしむるに適せるを、實に櫻の木をして花の木たらしめ、櫻の花をして日本の花たらしむるに至りたるものは、日本の地味氣候と日本人の趣味嗜好との合併作用

に外ならざる也。

日本の櫻にも亦實を結ぶ種類あり、されど、其實甚だ小にして且つ味無く、殆んど食ふに堪へず、而も、此の如き、有れども無きが如くなる實にてすら、之を結ぶが故を以て、其木の花の美を害する

こと非常也、赤小豆よりも小粒の實なれど、日本の櫻は之を結ぶが故を以て其花の價値を失はざるを得ざる也。

此に於て予は知る、日本は、獨り實の木たる櫻の存在に適せざるのみならず、亦實の木なる櫻の存在に同意せずして、花の木たる櫻の存在を保護する國なることを、此の如く

自然淘汰と人為淘汰との兩作用並行はれたる結果、日本の櫻花は有史以前より漸々進化して、遂に今日の如く比類無く優美高尚なるものとなりたる

に相違無し、果して然りとせば

櫻花が日本國の土質及び日本人の氣風と深き關係あるの理由亦解釋するに難からざる也。

されば、日本の風景は、松の綠素と櫻の白素と相待ち、松の骨髄に櫻の皮肉を加へて、始めて完成せらるゝものにして、松と櫻との調和配合は、得も云はれず

日本の趣味

日本の趣味

を成す也、予は京都の春を訪ふ毎に、未だ曾つて櫻と松との配合の日本の美觀を發揮するに恍然たらしめられざるは無し、姿態に人工を加へられざる自然の松、それも、山地に生じたる優美なる赤松と櫻との調和に過ぐるものあるを覺えざる也、古歌に曰く

見渡せば柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりける

と、されど、櫻と柳との配合は、之を想像してこそ如何にも美なるが如くなれ、實際想像程配合好きものにあらず、又

夕つく日さすや岡部の木枯らしに松を殘して散る紅葉かな

の古歌を唱し來れば、松と調和するもの、楓の紅に過ぐるあらざるが如しと雖も、これとて、松と櫻との配合が日本の風景の神髓を發揮するには較ぶべくもあらず、山の大部分松に蔽はれて、其綠打煙るが如くなる間に、物に紛れぬ櫻の白さを點綴し、而して、之にあしらふに堂塔の古び寂びたるを以てす、更に、之に添ふるに流水の

日本の風景

清く滑かなるを以てす、斷橋あり、茅店あり、葛に鎖されたる碑あり、苔に封じられたる徑あり、是等の物皆點するに落花を以てす、こゝに

我等の祖國日本ある

を意識し、日本の眞に愛すべく樂むべきを覺知せざる者ありや。

其五 櫻及び松と國民性との關係

櫻及び松と國民性との關係も、亦輕視すべからざるもの也、而も、予が斯く云ふは、例の「敷島の^{大和心}」の和歌の如き徒らに感情的なる言を弄せんとしてにあらず。

前に述べしが如く、日本國の土質及び日本人の氣風は、實を採るべき木たる櫻を化して、花を觀るべき木となしたる程それ程、櫻は日本人の趣味に適せり、即ち、櫻と國民性との關係は、肯て櫻は、國民性を支配する神秘力ありと云ふにあらず。

櫻及び松と國民性との關係

して、特に櫻花に趣味を感じて之を絶愛するの點に、國民性を窺ふべしとする也、換言すれば

櫻花が國民性を養成したるにあらずして、國民性が櫻を養成したる也

也、敷島の^{大和心}が櫻を養成せられたるにあらずして、櫻が敷島の^{大和心}に養成せられたる也。

松も亦爾り、此樹の日本國土に充滿せるは、其實用的なると、生存力及び繁殖力に富めるとの爲めのみにあらずして、亦是れ

日本の國民性が櫻の如く松を愛好するが故

なるに外ならず、斯くて、國民一致して松の生育を助け、其繁殖を謀りたるの結果、能く、今日の如く、松を以て國土の周邊を包圍するの觀を呈せしむるに至りたる也。

日本人が如何に松に趣味を有することの深きかは

新年劈頭の七日間を松の内と稱して、各戸必ず門前に松の枝或

は其若木を立つる

に依るも其一斑を窺ふに足るべしとなす、日本に於ては、其姿態に人工を加へられ、亦其存在の意義にも理屈を附せられて、厭ふべき俗臭を帯ぶるに至れる程、それ程松は普遍的に愛好せらるゝ也、俗化は決して喜ぶべき事にあらずと雖も、一端に於て俗化せらるゝに至り、始めて其趣味の普及せるを知るべき也、「山里は松の音のみ聞き慣れて」と云ひし蓮月尼にのみ、松は趣味を解せらるゝにあらずして

目出度く若松様よ、枝も榮へて葉も繁る

と、たゞ無暗に目出度がる凡俗も亦非常に松を愛好するにあらずや、これに比すれば、櫻は、松の如く無暗に目出度がられず、亦其姿態に俗悪なる人工を加へられざるを幸福とすべしと雖も、獨り

山寺の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りけり
と詠せし人へのみ趣味を見出だされたるにあらずして

酒無くて何のおのれが櫻かな

と罵る者にも、之を賞観するの資格あるを主張せらるゝ點に於ては亦松と異なる所無き也、斯くて

敷島の大和の國は、松の國なると共に亦櫻の國にして、敷島の
大和の人は松の人なると共に櫻の人

也、松の趣味、櫻の趣味は、俗非俗、凡非凡をおしなべて、之を一
坩堝の中に陶鑄し成したる也。

予は進んで、新年に七日間の松の内あるが如く、四月上旬櫻花の
候を以て、七日間の花の節となさんことを主張す、勿論、特に斯く
爲さずとも、日本人は櫻花の候を以て特別に興へられたる遊樂の時
となすに敏なるものと雖も、予は更に進んで、松の内のそのの如く、
此間を以て或る根本的意義よりせる神聖なる期間となすに至らんこ
とを希望する也。

日む無くんば唯一日にても好し、四月某の日を以て櫻花祭を舉行

すべし、但し、櫻花祭など、云はゞ、何の根底無き架空の言と聞く者もあるべければ、肯て爾らざる所以を説くと共に、櫻花祭の如何にして舉行すべきかを説かん。

かの、三月の雛祭はど、日本に於ての優しく床しく麗に美しき風俗はあるまじ、正月の儀式、五月の節句と共に、千萬年後迄も、日本國のあらん限り之を保存すべきのみならず、國民相率ゐて益々之を盛にせんことを思はざるべからざる也、毎年一回の雛祭は、日本人を美育し趣味育する所の毎年一回の學校にして、千萬年を経るもなほ其閉ぢらるゝ期は無き也、たゞ、予が之に就いて遺憾を感ずるは、雛祭を以て櫻花と一致せしめずして桃花と一致せしめたる、古人の用意の淺薄なる點なりとす。

尤も、雛祭の裝飾に桃花を用ふることは、支那の古儀を應用するものにして、之に歴然たる出所を認むべしと雖も、桃花は元來、野頭に在りて田舎の趣を爲すと、溪間に在りて仙郷の致を成すとの、

兩極端の趣致を發揮し、正に俳聖芭蕉が

桃は仙家めき又田舎めく

と云ひしにかなへるものにて、尊貴富榮なる内裏の光景に擬せる雛祭と調和するものにあらず、曲水に盃を泛ぶてふ三月三日の節句は支那傳來のものなれど、此節句に行はるゝ所の雛祭は全然日本的なるものにして、而も、其尊貴富榮なる趣致は、極めて好く櫻花と配合する也、但し、新たに明治に入りて設けられたるものにあらざる舊來の節句的儀式は、皆太陰曆に據るものなりしを以て、雛祭と桃花とは、好く一致したりと雖も、太陽曆に據れる今日の三月初旬は未だ桃花の節にあらず、故に、之に室咲の桃を用ふるの不自然を敢てせざるを得ずして、室咲の桃をも得ること能はざる僻陬の地に於ては、巳むを得ずして花無きの枝を用ふ、斯る次第なれば、櫻を以て桃に代ふるに至るや、愈々以て室咲及び花無きの枝を用ひざるべからずして、予が櫻花と雛祭との配合と云ふも、亦無意義の言たる

雛祭と櫻花

を免れざるが如し、されど、退いて思へば、太陰曆の三月三日なるを以て節物風光と調和する雛祭を、單に、月日の數字に拘泥して、之を太陽曆の三月三日に改むるは、其謂はれ無き事也、節物風光との調和を無視するは、雛祭の根本義を蹂躪するもの也、之を以て、雛祭は宜しく、太陰曆の三月上旬に相當する太陽曆の四月上旬に適宜の日を擇びて行ふべし、春の光耀、春の盛榮、其頂上に達せる時に於て、適宜の一日を擇ぶを可とす、果して然らば、櫻花と合期せる四月十日前後の或一日を以て雛祭の節と定むるも亦不可無かるべし、寧ろ斯くて始めて雛祭の根本義を發揮するを得べき也、即ち雛祭と櫻花祭とを一致せしめ、雛祭は即ち櫻花祭にして、櫻花祭は即ち雛祭たらしむべき也。

雛祭と櫻花祭とが一致せしめらるゝに至らば、其日の裝飾には必ず櫻花を用ふべし、雛壇には勿論櫻花を挿みたるの花瓶を少なくと

せると日
し雛一本
む壇の國
べと大を
し化なし

も一對は必ず置くべく、雛を飾らざる家にも、其日は必ず床に櫻花を挿むべく、加之特に其日の爲めに設けたる儀式としては各家の門前戶外に櫻の枝を立つること、須らく正月の門松の如くならしむべく、女は頭髮に、男は帽子に、皆花を簪して遊び狂ふべし、斯くて、山と云はず、野と云はず村と云はず町と云はず、全日本所として梢頭の花を見ざるは無きのみならず、千門萬戸皆花を押分けて出入し、往く者來る者立つ者坐する者盡く花を簪す、山野河湖田園邸宅より、人家櫛比せる市街、其家室筵席、一として落花飛英を帶ばざるは無く、以て日本國をして一の大なる雛壇と化せしめ、四千餘萬の男女老幼をして、雛壇に飾られたる人形の活きて動くものとならしむるを得べけん。

繰返して云ふ、櫻及び松と國民性との關係は、決して輕視すべき

ものにあらすと。

其六 櫻と其保母兼醫師

櫻及び松と日本國の土質及び日本人の氣風との問題は、既に述べたる所の如し、されど、なほ一つ、此問題の範圍内に於ける憂ふべく厭ふべき事項を遺せり。

松の生存力繁殖力の強盛なるに就いては、更に繰返して説明するの要無し、なほ、其必要の樹林として養成せらるゝ事情も再述するに及ぶまじ、畢竟するに、日本に於ての松は、予輩の注意を待たずして、益々繁殖するの勢力と運命とを有するものなりとす、されど櫻は爾らず。

他の國に於ては實を採る爲めに栽培せらるゝ所の櫻が、獨り日本に於てのみ、花を観るべき木となされたるに依つて見るも、其、松の如く如何なる瘠土にも堪ふるものにあらずして、地味氣候より影

響を受くることの少なきにあらざるを知り得べきが、實際、櫻をして十分に花の木たるの能事を了らしめんとせば、之が爲め相當に人を勞せざるべからざる也、早春に當りて、之に肥料を施すこと一回すべきのみならず、其落葉期に於て、必ず過剰の贅枝を切り拂ひて花を有つた枝を保護せざるべからざる也。

過剰の贅枝を切り拂ふことは、櫻に對して必ず缺くべからざる外科療法にして、若し之を怠る時は、中に花を有たざる醜き枝の塊りを生じて、花時に於て殊に人目に著るしく、之が爲めに其木全體の風致を損すること、恰も

美人の頬に腫物を生じたる

が如くなるに至らん、是れ、諸君及び予輩が、毎に庭園と路傍とに見出だして遺憾を感じる所にあらずや、滿樹白盡して些の瑕疵無きを櫻花の價値となす、之に、彎曲紛糾せる枝の塊りを發して、始めより密集せる葉を生ずるあらんか、他の枝の花は如何に美なりとも、

外科に對する
療法

其木全體は之が爲めに無價值となるを免れざる也、此の如くんば、寧ろ其木無きに如かざる也、始めより櫻を栽ゑざるを可なりとする也。

なほ、之に肥料を施さず、之が過剰の贅枝を切り拂ふことを怠りて、以て久しきに至る時は、遂には、其木全體病的となり、滿樹皆葉にして、綿密なる注意を拂ふにあらずんば、千萬の葉の底に蔽はるゝ數點の花を見出だすこと能はざるに至らん。

而も、病的なる過剰の贅枝を生じ易きは、庭園及び路傍に栽ゑらるゝ人力の結果の櫻にして、山林中に混交する自然の櫻には之を見ること少なしと雖も、其代り、自然の櫻は、地味氣候及び其位置の宜しきを得るにあらずんば、其木全體葉多くして花少なきを常とする也、之に依つて、櫻が人間の保護を必要とするを知るべし、人間は常に

櫻に對して保姆兼醫師

たらざるべからざる也。

更に一段、愛ふべき惜るべきは、日本人が一面に於て風致の樹木として櫻を栽培するに拘はらず、他の一面に於ては、山林中に混交する自然の櫻を見るに實用の樹木を以てし、濫に之を伐りて版木に供し、或は其皮を剥ぎて諸らぬ小器具の製造に充つる事也、殊に、櫻の皮を剥ぐの惡風は、花少なく葉多き木のみにとゞまらずして、花の木として十分に價值あるそれに對しても、毫も遠慮する所無きを横暴なる、纏て是れ、山中に見るべき櫻無からしめて、終に市城に及ぼすに至らんとする惡風也、東京及び其附近に就いてのみ例を擧ぐるも、現に、西多摩郡御嶽山の如き、東京より一日の行程の距離に位置する秀麗の境にして、而も頗る櫻に富むに拘はらず、其木の何れを見るも、皆皮を剥がれたる痕を留めざるは無く、獨り之に依つて樹身を醜くせらるゝのみならず、中には、之が爲めに枯死に瀕しつゝあるものをも見る也、豈獨り斯る山中の櫻のみならんや、

上野を見よ、芝を見よ、其他東京の内外至る所、人目の繁からざる地に在る櫻にして、大抵其皮を剥がれざるは無きにあらずや。

櫻の皮を貼りて製したる、煙草入其他の小器具に、如何程雅致ありとする歟、是等に特別の功能ありとする歟、櫻の皮を貼りて製したる小器具無くば、日本人は如何程の不便と不快とを受くるや、是等の小器具を製するが爲めに、數十年或は百餘年の星霜が作り成したる、珍重すべき櫻樹を、續々立枯に歸せしめても、毫も顧るに足らずとする歟、國民性と甚深なる關係ありて、而も、心を込めて保育するにあらざれば、其花の木としての本色を發揮せしむること能はざる櫻を、云はゞ、玩弄物的小器具の爲めに其皮の小部分を要せらるゝことの犠牲として死せしむとは、世に、此の如く大小本末の顛倒したる事ありや、予は敢て云はんとなす

十分に發育して見事に花を着くる櫻の一木を殺すは、世の凡庸なる人間一人を殺すよりも、遙に大なる損害にして、遙に大なる罪惡

る罪惡

なりと、一枝を折らば一指を切るべし、一樹を枯らさば一人を刑すべき也、若し夫れ、根本的意義よりする時は、櫻の皮を貼りて製したる小器具を愛用する者を目して、國賊の部類となす

も、亦敢て過激なりとすべからず。

既に吉野の例あり、予は、全國到る所の山を以て、他の實用的なる殖林事業を妨げざる程度に於て、吉野山と同色同香のものとなさんことを希ふ者也、予は、山を有せる者或は山に住む者を見る毎に、平生懐抱する所の

全國吉野山主義

を説くを常となせり、中には、予の言を是となして、既に之に着手せるあり、又、之より將に着手せんとするあり、別けて、武州西多摩郡御嶽山は、之を

刑さ一樹を枯らすべし一人をなら

全國吉野山主義

東方の吉野山となすべく詭へ向の地

なれば、近來此山の人に向つて、櫻樹を保育し栽培することを熱心に懲愆しつゝあり、左無きだに既に櫻花を以て名あるの此山は、今より十數年の後、東方の吉野山の名を以て遊客を吸引するに至らんこと必せり、疎狂予の如き、世に出で、何等の功を立つる能はずと雖も、若し、予の懲愆の力を以て、日本に多くの準吉野山を作り出だすことを得ば

自ら以て、世に對して偉大なる貢獻を成し得たりと誇負せんとす。

其七 日本の風景と杉

既に、日本の風景に於ける松と櫻との價値を説き了れり、予は、松を以て日本の風景に於ける主要なる綠素となし、櫻を以て之に配するの白素となせり。

されど、こゝに、松の外更に森嚴なる綠素あり、予は之を忘れたるにあらず、特に之が爲に言を費すべく、之を後廻はしとなしたる也、开は何ぞ

曰く杉也。

日本の風景に於ける綠素としての杉は、松の如く普遍的にあらず、又、松の如く數を以て優るにあらずと雖も、其印象の強度なる點に於ては却つて松に勝れり、或意味に於ては、日本の風景の骨髓たる松をして、其重要なる部分を杉に譲らしめ

杉を以て其頭腦となさざるべからざる也、杉の特色は、其蘊々として天を刺す戟の如くなるに在り、而して、其葉の硬にして鋭に、固着して密生せるに在り、其色の深緑にして黒からんとするに在り、松と反して陰濕の地を好み、土質其宜しきを得れば、生長甚だ速に、十年にして能く尺圍なるを致す、而して、其十分に發達したるものは、長さ百五十尺、徑六尺に及ぶ、

陰然たり、森然たり、嚴乎たり、凜乎たり、神靈の氣を包み、鬼魅の氣を含む、其一樹の獨立せるを望めば、潭鐵の甲冑を着けたる天將の風雲を叱咤して立つが如く、其十百千萬相倚りて林を成すを見れば、凜々たる黒氣の間より紫煙を蒸し出だして、天地を陶鑄するの力を發するかと思はしむ、實に

樹木の中最も崇美なるものは杉にして、之に、人を壓服するの威力。

は蓄へらるゝ也、松は雄健なりと雖も、其致は動的にして、たとへば波浪の洶湧するが如く、無底の深潭の紺碧をなして一絲の波を動かさず、中に惡龍ありて人を引き入れんとするに似たる杉の趣とは異なれり、此の如き趣致は杉の獨り領する所にして、嘗に松のみにあらず、樅も、檜も、松栢科中一として之と同じきものを見ざる也。木材としての杉の効用と其利便とに就いては、本書の問題外なれば敢て云はず、されど、其密生する所の地に多量の水分を含ましめ

て、而も之を純淨甘美ならしめ、適度に調節して之を低地に下し、以て江河の源流となすの作用は

風景觀の一面よりするも、亦大に杉を贊美

せざるべからずとなす、なほ、神社の境内に在りて其壯嚴を添ふることも、杉に對しての重要な着眼點なりと雖も、是等以上、風景觀よりして最も杉に重きを置くべきは

杉に適するの地は又櫻に適するの事實

あるを以て也、自然の櫻多くして、而も其花の美なる山は、必ず杉を栽培して好く發育すと云ふ、故に、杉を栽培して好く發育する山は、櫻を栽培しても亦好く發育すべきを信じ得る也、是には顯著なる例證あり、他無し、前に擧げたる吉野山にして、櫻花を以て有名なるの吉野山は、極めて好く杉の栽培に適し、吉野の住人をして、現に、自然の教ふる所に随つて、杉の養成を以て其事業となさしめつゝある也、吉野は、獨り櫻の吉野なるのみにあらずして、亦杉の

吉野也、吉野に於ては

其山は櫻を産し、其人は杉を育つる

也、武州御嶽山も亦爾り、此山自然に櫻に當みて而も好き花を着くこと、他に抽んでたる特色なると共に、亦、杉を栽培して良好なる發育をなすを見る、予が、御嶽山を以て東方の吉野山となすべしと云ふも、是等の事實あるを以て也、而も、是等の事實は吉野山及び御嶽山に認むべきのみならず、細かに注視すれば、何れの山にて、自然の櫻に富みて其花の見るべきあれば、之に杉を栽培して必ず良好なる發育をなすべく、又、杉に適するの山は、櫻を栽培しても同じく十分に花を有つの木たらしめ得べきを知らるゝ也、杉と櫻とは果して、同一の地味氣候を必要とするものなりや否やは、學者及び實驗家の研究問題に屬して、予輩の輕々しく答案を呈すべきにあらずと雖も

事實をして事實を證明せしむれば

杉に適する
山は又櫻
に適合す

亦其爾る所以を信じ得ざるにあらずとなす、故に、櫻に適するの山には杉を養ふべく、杉に適するの山には櫻を養ふべしと定むること、實際に於て何の差支無き也。

但し、櫻と杉とが必要とする所の地味氣候は同一なりとするも、櫻と杉との風景上の配合如何に依りて、此問題或は價值あるものとなり或は價值無きものとなるべし、此に於て進んで、櫻對杉の風景觀に移らんとす。

松と櫻との配合の、柳と櫻との配合に優れることは、予既に之を説きぬ、颯々として波の如き音を帯ぶる松風に連れて、ハラクと雪に擬ひつゝ、花の散る光景は、活動せる自然美の極なるものにして、之を京都附近の山水の間に見る毎に、予は、異色なる樹木の兩種が好配合をなすこと松と櫻との如くなるはあらざるを覺ゆる也、されど、眸を轉じて杉と櫻との配合を見るに至れば、亦これに別様の趣致ありて、敢て松と櫻とのそれに劣らざるを首肯せらるゝぞかし。

杉と櫻との配合は、其兩極端なるより趣致を生ずる也、第一、杉は樹木の中の黒色（濃緑にして黒に入れるもの）を代表せるものなるに、櫻は其白色を代表せるものにして、兩々相映發する所、白き物は愈々白く、黒き物は益々黒く、共に極度に其色の美を成す、而して、杉の陰暗にして森嚴なると、櫻の明快にして艶麗なるとの對照は、恰も、威風凜々たる鬚眉男兒に配するに、絶世の美人を以てするが如く

陰●暗●森●嚴●は●愈●々●陰●暗●森●嚴●に●、明●快●艶●麗●は●愈●々●明●快●艶●麗●

なるを見、之に依つて、一入強く杉と櫻との趣致を感じる也、兩種の樹木の對比觀として、是程強く人の興趣を刺戟するものあるを覺えざる也。

此に於て、櫻と杉との風景上の配合如何は、確に有價値の問題也。

◎日本の風景の特に尙ふべき點

其一 日本風景の特に尙ふべき點は

普通に云ふ所のそれの外にあり

日本の風景の特に尙ふべき點何れにありや。

或は曰く、日本の風景の特色は火成岩の怪奇なる状態にあり、火成岩に對する流水の浸蝕に在りと。

或は曰く、日本の風景の特色は水蒸氣の濃厚なるに在りと。

爾り、それ等の點も日本の風景の特色にあらずとせず、されど、予を以て之を見れば、火成岩の怪奇なる状態、火成岩に對する流水の浸蝕等、奇岩怪石を基本としての風景は、美感よりも寧ろ好奇心を満足せしむべきものにして、何れかと云へば箱庭的なる觀物也、

怪奇に兼ぬるに雄大を以てして、始めて風景としての價値を成すべく、單に怪奇なるのみにして雄大を缺くときは、之を畸形なる風景と呼ばざるを得ず、斯くて、何れかと云へば、日本に於ける奇岩怪石の風景は其畸形なる部類に近きものにて、怪奇に兼ぬるに雄大を以てするの風景は、却つて日本以外の地に之を求むべしとなす、故に

火成岩を云々し、流水の浸蝕を云々するは、未だ日本の風景の眞趣を解せざる者

と云ふことを得べし。

水蒸氣の濃厚なるを以て日本の風景の特に美なる所以となすも、亦適切妥當なりと云ふを得ざるの論也、若し、單に水蒸氣の濃厚なるが風景の美なる所以ならば、日本よりなほ温度高くして蒸發盛なる海に包まるゝ南方の島嶼は、日本より遠さかるに隨つて、漸次に好景の度を加ふべき等ならずや、固より、日本は熱帶の附近より寒

單なる水蒸氣に美らるる風景の所以なるを以てする

帶の附近に迄、温帶を中斷して連なれる細長の島國にして、傍に大陸を控へ、又近く暖流の地勢に傍うて横たはるあり、爲めに、種々なる氣象上の要素の合併作用が、此國をして、比較的水蒸氣の分量に富ましめつゝあるは、疑ふことを要せざる事實なりと雖も、單に水蒸氣の比較的多量なるが、日本の風景の特に尙ふべき點にあらず、他に之と相俟つ要素あるにあらずば、水蒸氣の多量なるも亦何かあらん、要するに

水蒸氣の比較的多量なるが日本の風景の特に尙ふべき點の一半にして、他に其爾る所以の一半

無きを得ざる也、然らば則ち、火成岩の怪奇なる状態、火成岩に對する流水の浸蝕等はそれなるかと云はん、肯て爾りと云ふことを得ず、他に、水蒸氣の比較的多量なると相俟つて、日本の風景の特に尙ふべき點を成すの要素あるを見る也、水蒸氣の比較的多量なるは、主たる此要素を助くる從的作用を爲すに過ぎざる也、果して然らば

日本の風景の特に尙ふべき點を成す

其要素は明らかに指點し得べきものなる歟、曰く爾り、乞ふ、回を改めて之を説かん。

其二 特に日本にのみ限れる風景

乞ふ、先づ日本の勝景を列舉せん。

日本の風景は怪奇峭拔を以て勝る、九州の耶馬溪、山陽の豪溪、甲州の御嶽、上州の妙義山、陸中の五串溪、羽後の雄鹿半島等之を證す。

日本の風景は温雅潤圓を以て勝る、京都、奈良、吉野等之を證す。

日本の風景は明快鮮麗を以て勝る、須磨浦、舞子濱、和歌浦、嚴島、天の橋立、三保の松原、田子浦、江の島、松島等之を證す。

日本の風景は莽蒼跌宕を以て勝る、富士の裾野、那須野、輕井澤、奥羽及び北海道の原野等之を證す。

日本の風景は淡遠縹緲を以て勝る、瀬戸内、琵琶湖、出雲の宍道

湖及び中の海、遠江の濱名湖、相州海岸、常陸の霞ヶ浦、青森灣、羽後の八郎潟、臺海淡水港等之を證す。

日本の風景は陰暗森嚴を以て勝る、紀伊の那智、高野、信濃の木曾、下野の日光等之を證す。

其他、舉げ來らばなほ多くを舉げ得べけれど、先づ大體にといめ置かん。

此の如く、日本の風景は多面多角也、種々なる美點を有せり、されど、以上舉げ來る所の如きは

特に日本に限りたる好風景と云ふにあらずして、之を世界の全面に求めば、是等に匹敵すべきもの、及び是等を凌駕すべきもの亦少きにあらずる

べし、されば、是等の諸點より、日本の風景の特に尙ふべき點を見出ださんとするは誤り也、是等の諸點より、日本の風景の特に尙ふべき點を見出だしたりとなして得々たるは、畢竟

特限好に
に風日に
好景た日
ふへ景た日
るふ景た日
とらとる本
ざ云のに

遼東の豕の譏りを免れざる愚劣の態度なるのみ。

果して然らば、日本の風景の特に尙ふべき點何れにありや、曰く、亦是れ、以上擧げ來りたる所と全然異なる方面に見出だすべきにあらず、却つて以上擧げ來りたる諸點の中に包含せらるゝを首肯すべしと雖も、たゞ其着眼點の異なるを以て、其所に別様の風景は見出ださるゝ也、要するに、地球上特に日本にのみ限りて、他に之を求むべからざる風景は

必すしも、何國何郡の何山、或は何野、何川、何湖、何溪、何浦にあらざればと云ふにあらずして、本州及び四國九州を併せたる舊來の日本に於ては、何れの所に於ても之を見出だし得べきもの

なりとす、寧ろ、此段の風景には、名所と名所ならざるとの別無し、名所の中にてても、之を見出だし得る所あれば、亦見出だし得ざる所

特に日本に
限るに
風景

日本に
尙ふに
風景の
特き點

ある、名所ならざる地も亦爾り、或は、眼界の全部が此段の風景を以て満たさるゝあり、其一小部分を除きたる大部分、若しくは其半部、若しくは其大部分を除きたる小部分に見出ださるゝことあり、又、時季及び氣象に由りて、其見出ださるゝ場合と見出だされざる場合とあれば、肯て一定不變のものとなふこと能はざる也。

此に於て予は、明らかに、日本の風景の特に尙ふべき點は何れにありやを、指示するの義務あり。

他無し、是れ

形に於ては凡と奇との中間、色に於ては濃と淡との中間、すべて其適度を保てる土石水木の配合

也、されど、斯く抽象的に云ひては、何が何やら他人に通じ難し、故に、成るべく實際に適切なる云ひやうをなさんに

山△丘△、溪△谷△、原△野△、河△沼△、湖△海△、林△樹△、竹△石△、雲△烟△の△布△置△疎△密△
す△べ△て△其△宜△し△き△を△得△て△、柔△か△く△秀△で△た△る△曲△線△を△其△輪△廓△と△な△し△、

四八
各種の色の配合、強烈に視覚を刺戟せずして、適度に美感を起さしむる上に、一面に薄紗を掩ひたる如く、淡靄即ち水蒸氣の適度に濃厚なるを帯ぶる

もの即ち是れ也、濃彩細筆の畫にあらす、淡彩省筆にして、而も其線盡く柔かく秀で、色も亦淡中に幾十百の差別階級を含み、たい見れば特に賞すべきを覺えざるが如しと雖も、之を咀嚼するに随つて愈々益々深味を生じ來るもの也。

すなはち、日本の風景の特に尙ふべき點は、怪奇峭拔にあらす、温雅潤圓にあらす、明快鮮麗にあらす、莽蒼跌宕にあらす、淡遠縹緲にあらす、陰暗森嚴にあらす、而も亦是等と離れたる所に見出だすべきにあらす、是等より圭角を除き、糟粕を漉し、是等に含まれたる雜質を篩ひ、是等の固着密集せる部分を切り棄て、而して後、すべてを打して一九となし、上に、淡靄の衣を着せたるもの、是れ日本の風景の概念也、是等の

形と色との適度は、獨り日本に於てのみ見るべきものにして、日本にても、北海道及び樺太と琉球及び臺灣との兩端に至れば、此適度なる範圍を超越

する也、否、強ひて北海道及び樺太と琉球及び臺灣とに至ることを要せず、北の方奥羽と南の方九州とに至りて、細かに其風景に注目し來らば、敢て適度なる範圍を超越せりと云ふべき程顯著ならずと雖も、亦將に超越せんとするの境上に位しつゝあるを知り得べき也。土佐派の繪、光琳風の畫、共に是れ日本の風景の正當なる感化を受けたる結果にして、語を換へて云へば、日本の風景を正當に咀嚼し得たる結果なりとす、されど、今日に於て是等を踏襲するは愚也、今日に於て、西洋畫、西洋畫にかぶれたる日本畫、守株的日本畫等の外に、光琳が嘗つて新機軸を出だし、如く、日本の風景の特に尙ふべき點を解して、十分に之を咀嚼し、其形と色とを理想化して、一新機軸を出だすの畫家を生せば、天下を風靡せんこと必せり、人

物を描くに當りても、風景中の一分子を抽出したるものとして筆にする時は、之にも能く特色を發揮せしむることを得べき也、予に畫筆あらば之を描くに躊躇せまじきを、文字にては表はし難きを憾みなる。

其三 「霞」及び「朧」を論ず

當然の順序として、これより水蒸氣の問題に入らん。

既に述べし如く、水蒸氣は日本の風景に對する衣服にして、これあるが故に、絶世の佳人をば、身に纏ひたる薄紗を透して見るの心地し、風景の美一段之が爲めに加へらるゝを覺ゆる也、而も是れ、薄きに失しても可ならざれば、餘りに濃きも亦宜しからず、
日●本●の●如●く●濃●淡●其●中●間●を●得●て●、●始●め●て●風●景●に●靈●妙●な●る●作●用●を●施●し●、●す●べ●て●の●線●、●す●べ●て●の●色●を●、●得●云●は●れ●ぬ●美●し●さ●柔●か●さ●に●、
烹●煉●す●る●な●れ●、●勿●論●、●日●本●の●風●景●は●、●此●濃●淡●宜●し●き●を●得●た●る●水●蒸●氣

水蒸氣は日
本風景の
衣服

と、極めて好く調和する程度に在る故、水蒸氣の作用も亦結果を得るものと知るべし。

然らば、水蒸氣が風景に作用する状態如何と云ふに、普通に謂ふ所の

「霞」と「朧」

とに依つて之を説明することを得べし、但し、「霞」と云ふ字は本來「夕焼」を意味し、「かすみ」には「霧」の字を用ふべきなれど、我國に於ける普通の仕來りに随つて、「霞」を「かすみ」と讀ますることゝなしたり。

「霞」も「朧」も共に水蒸氣の風景に作用する状態を意味せるものにて、要するに

霞は晝の朧に、朧は夜の霞

なる也。

霞は、霧及び「もや」(我國にては霧の字を之に用ふ)と異なり、

晝の朧は
夜の霞に
似て

普通はこれぞと云ふべき程目に立たずして、たゞ、物の色と形とを不鮮明ならしめ、且つ、観る者の位置を遠ざかるに随つて、一段々々不鮮明の度を加へ、而も、之が爲めに風景は得云はれず美化せらる、なほ、時としては、霞棚引くと云ふべき度に、雲にあらす、霧にあらす、烟にあらす、「もや」にあらす、卒然として之を見れば濃臙と横たはる氣あれど、更に眸を定めて視るに至れば何物をも認むる能はざることあり、一たび霞の加はるや

風景に於ける霞の神秘

風景は或る神秘力の支配を受けたるが如くに變化し

山も谷も野も海も村も里も町も市も、監獄署も辻便所も、皆美にして繪くべきものとなる也、總體の風景には總體の霞あり、一つ宛の物には一つ宛の霞あり、大なる物には大なる霞あり、小なる物には小なる霞あり、長き物には長き霞あり、圓き物には圓き霞あり、動く物には動ける霞あり、靜なる物には靜なる霞あり、一茶の俳句に
牡丹餅を啣へて霞む鴉哉

と云ふあり、是れ故らに滑稽を弄するにあらすして、霞を細密に觀じ得たる適切妥當の語なりとす。

而も、霞は一般に春期に限りたるものとせられ、春と云へば、花よりも先づ霞を思はるれど、予は敢て云ふ

其實、霞は肯て春期にのみ限りたるものにあらず

と、但し、冬期の凍固乾燥して水蒸氣の美を見ることが能はざる數ヶ月の後に、始めて、地脈に暖意を生じて、神秘力ある春霞の爲めに、風景は魔術の如く一變せられ、即ち、牡丹餅を啣へたる鴉の狀態迄も妙趣云ふべからざるものあるに至るが故に、其乾燥の時期との對照より

霞は特に春期に於て人の注意を呼ぶ

を得る也、故に、霞と春とを結び著けて、春霞と稱しつゝ之を賞美し、随つて、春霞以外の霞は自然賞美の範圍外に置かれ、終には、春霞以外に霞てふもの無きが如く見做すの習慣を生じ、其結果

世間多数の撥板漢をして、春期の外には霞てふもの無しと信じ、且つ定めしむる

に至りたり。

されど、水蒸氣の昇騰及び浮遊は、凍固乾燥の時期の外、常に之を認むることを得べし、春に於てのみ特に之を霞と呼ぶとは雖も

霞と呼ぶる、實に適せるものは、夏にても秋にても冬にてもある

也、殊に、十月小春と稱せらるゝ陰曆十月頃には、霞が風景を美化する場合少なからずとなす。

なほ、日本に於ては、何れの時期にても霞が風景を美化するの事實を適切に見るべく、眼を轉じて「臙」てふものを問題とするを可となす。

前にも述べし如く、霞と臙とは、齋しく水蒸氣の風景に作用する状態を意味するものにして、霞は晝の臙、臙は夜の霞、單に夜と晝

四歳
季の
共に
實に
在り

とに於て其名を殊にするに過ぎざるが

此臙も亦春夏秋冬何れの時に於ても認むべきに、霞と同じく春に限りたるものと定められ

其他に於ては、妙趣盡きざる臙の頂上に風景が美化せらるゝことありても、敢て之を臙とは云はざる也。

臙の名こそ春にのみ限られつゝあれ、臙の實は何時にても之を認むることを得べく、殊に、其夜景に作用する度が、晝景に作用する霞より、更に一層顯著なれば、水蒸氣の風景に作用する状態を見るべく最も適當也。

臙は、月の夜の月に趣あり、星の夜の星に趣あり、月無く星無き夜には燈火に趣あり、總體の風景には總體の臙あり、一つ宛の物には一つ宛の臙あり、大なる物には大なる臙あり、小なる物には小なる臙あり、長き物には長き臙あり、圓き物には圓き臙あり、動く物には動ける臙あり、靜なる物には靜なる臙あること、亦霞のそれと

臙とは如何なるものぞ

異なる所無くして、而も其趣の深きこと更に一段也、臙とは、明るさの中の暗さにして、暗さの中の明るさ也、明るき物を暗く見せ、暗き物を明るく見する間に、靈妙不可思議なる作用あり、以て一寸立方の空間に一寸立方の純金と齎しき價值ある絶好の景趣を成す也。

臙には融和暢快の趣味あり

宿かさぬ人のつらさを情けにて臙月夜の花の下臥

の和歌之を鼓吹す。

臙には幽婉高古の趣味あり

女具して内裏拜まん臙月

の俳句之を發揮す。

斯くて、霞が春に於て著るしく人の感興を引くが如く、臙も亦、凍固乾燥せる冬期の後、久々にて之に接するが故に、特に春のものとのみ限れるが如く思ひ倣さると雖も、實際

眞の臙夜の頃には新緑の頃

眞の臙夜は春よりも夏の初に在り、梅雨期將に來らんとする新緑の頃
に在る也。

新緑の頃は、最も水蒸氣の昇騰及び浮遊に富める時期也、盛夏の如く猛烈なる暑氣にあらずして、底の底より柔かに物を蒸し出だす温熱を有し、加之、草木の嫩葉は争うて飴の如き氣と霧の如き氣とを吐き、晝には日光を遮し、夜には月色を篩ひて、細かに視れば、すべての物を七彩の淡靄に包み、風無く氣鎮まれるの日には、鐘の音さへふやけたるが如くに聞こゆ、殊に、思ふ所あるが如く恍然たる夜の趣は、喜ある者をして益々其喜を加へしめ、悲ある者をして愈々其悲を深からしむる也、されば、此時期に於ては、風と雨とを除きて、毎夜必ず

春期のそれよりは却つて感想深き臙夜を成す、たゞ之に臙夜の名無きのみ。

新緑の時期は、晝に於ても亦感
深き霞を成す也、夜に於て此の如き
暈を成す程濃厚にして温暖なる
水蒸気は、晝に於ても亦風景に顕著
なる作用を爲さざる筈無し、而
も是れ、理屈にあらずして事實なる
也、満眼の新緑を籠めて、或は
淡紅に、或は淡黒に、或は淡く金色
をなし、而も其有るが如く無きが
如きの色と象とは、春の霞よりは一
段煉熟したるものにて
新緑の頃の霞は、春のそれに比
べて色を生じたと共に、中に
一種の光を包むが如き趣

あり、霞の名無くして、霞の名ある
それよりは、實に於て勝れるを
見る也。

風景其物として十分に價值ある
の上、晝は霞、夜は暈を衣とする
が故に、他に無き特色を發揮する
は日本の風景なりと雖も、一年の
中、制限されたる或時期のみ十分
に美にして、其他は爾らざるもの
とせば、日本の風景も亦非常に尙
ぶべきにあらざるを、幸にして、

霞と暈との衣は何時にてもあり、
其名に拘はらずして其實を見よ、

豈獨り春期と新緑の時期とのみ
ならんや。

潮曇り松に籠もりて月薄く鎌倉
山を夏の暈夜

の和歌に依つて其實景を想像し
來れば、盛夏の候にも亦暈の趣
致を領し得べきを首肯せられ、
又、霞無く暈無き筈なる凍固乾
燥の冬期に於てさへ、如何にか
せる氣象上の作用よりして、雪
の後などに、俄に暖かなる一日
を得るときは、晝は霞、夜は暈
の絶好なる風趣を成すことあり、
されば、秋に於ては更に多く此
種の現象に接するを得べく、就
中、春に似たる霞と暈とを呈す
る所謂十月小春の時期は、日本
に於ては、多くの部分に菊と紅
葉との秋色を殘すを以て、なほ
之を秋の範圍となすことを得べ
し、此に於て
霞と暈との衣は、四季共に在り
て、日本の風景と離るべからざ
るもの

なること、異論を容るゝの餘地
無き也。

其四 霞と風景との關係の一例

日本が特に水蒸氣の多量なるにわらず、亦、水蒸氣の多量なるが故に日本の風景は美なるにわらずと雖も、日本の風景は水蒸氣の配合を得て他に無き美觀を呈すべく適度に、日本に於ける水蒸氣は風景に配合して他に無き美觀を呈せしむべく適度なることは、既に之を論じたり、而して、水蒸氣が風景に作用する状態たる霞と暈との衣は、日本に於ては四季共に在るものなるを説きたり。

此に於て、水蒸氣が風景に作用するとせざるとに依つて、其美觀に如何程の差違を生すべきかを、予が經驗したる實例に依つて述べんとす。

予は、三崎より相州海岸を徒歩して逗子に至りしこと數回に上れり、此間約六里、途中に林村あり、其海岸深く灣をなして、波穏なること湖の如く、左右の突角内に曲りて囊の口を形造り、其間漁郷

と林叢と相交はりて遠近參差の景を爲し、灣内亦常に漁舟の泛ぶあり、而も、此灣の風景をなす最大要素は、灣外左右より半ば形を現はして、松に蔽はれたる島ある上、之が背景をなして富士山半天に聳え、而も灣内に影を倒まにせるに在り、なほ、岸には並び立てる松あり、松の外は芝生にして直ちに波打際に連なり、芝生に腰を掛けてさい波に足を濯はしむることを得べし、其水の穩なること知るべきにわらずや、之を三奇^山逗子間第一の好景となす。

予が始めて此好景を見出だしたるは、一春菜花黄に桃花紅なる時なりき、灣内の水蒲葡萄色を帯び、遠近幾十段の濃淡ありて、棚引きたる霞の層を見るべく、漁舟の行き交ふ有様、夢裡の光景よりも淡くして、而も、其中に人の動けるを指點すべく、灣外の松に蔽はるゝ島は、半透明體の如き藍色を呈し、雪を戴ける富士は、薄絹の戸張を隔て、イめる美人の如く、朦朧たる藤鼠に匂へり、其風景の含蓄深くして趣致と情味とを兼ね備へ、而も純日本畫的にして毫も

西洋畫及び支那畫の臭氣を帯びざる、他に類無きものと思へり。

此に於て、予は人に向つて盛に林の灣の風景を説くに至りたるが、其後、一友と共に再び三崎返子間の行脚を企てたり、此行主として林の灣を訪はんが爲めにして、友は、予の言を聞きて見ぬ戀に憧るゝと共に、予の言の果して實地に合へるや否やを試みんが爲めに之を企てたる也、時は秋の初なりき。

灣に近づきて、通路より左に入り、松間を穿ちて、波打際の芝生の上に立てば、友は「此所がそれか」と問ふ、「さうだ」と答ふれば、「何だこんな所」と案外の不足顔也、而も、予は之に抗辨すること能はず、唯だ「不思議だなア」と云ひ得たるのみ。

實に、不思議と云ふの外無し、前には、世に斯る好風景の地あるべしと想像し得る以上なりし此灣が、ありふれたる平凡の風景となりて見ゆる也。

此日は、晴天連日の後の曇天にして、今にも泣き出しさうなる空

風景の美化の程度と水分の多寡

合に、もとより富士は見えず、而も、灣外の松に蔽はれたる嶋は却つて近くあからさまに見え、風景に奥も底も無く、氣壓低ければ、水面地表に横たはるの水蒸氣も無き也、即ち、此日の林の灣の美ならざるは、水蒸氣が風景に作用せざる爲め也、適切に云へば

前日に於て林の灣が美觀を呈せしは、水蒸氣が風景を美化する程度に作用したるが故にして、今日其美觀に接せざるは、水蒸氣の分量乏しくして、風景を美化する程度に作用し得ざるが故也、此に於て第二の問題を生ず。

予は、案外の感を其儘に打明けて友に謝し、結局、林の灣の風景は晴れたる春の日に限り、灣の口に臨める富士の、目に見えつゝ、而も霞に鎖さるゝ時ならでは、此灣の風景を是非し難しと云ひて、我乍ら薄弱なる辯解に一時を細縫しぬ。

これより後は、林の灣の風景は、春にして而も富士の見ゆる晴れたる日にあらざれば、態々行きて見るべきものにあらすと信じつゝ

ありしが、或る夏の日、それとなしに此所を通り過ぐる機會ありたれば、此度は多大の望みを繋かずして、ほんの申譯ばかりに灣頭に立寄りたる所、果して、左したる美觀に接すること能はざりしかば、是等の經驗よりして、愈々、林の灣の風景は春の或日に限れるを確めたり。

然る所、其後又、四度目に此所を過ぐる機會を得たり、同じく夏の日なりき、前の夏の日には、西南の風強かりしが、此日は風無くして暑さ甚だしければ、更に、前の夏の日よりも風景好からざるべしと、灣頭に立寄る心は無かりしが、此度だけ前例を破るも不本意と、進まぬながら、又も松の間を芝生に出でたる所、豈測らんや、此度は初度に劣らざる絶景也、風無き夏の或日の夕に近き水蒸氣の作用は、林の灣の風景を活かしたる也。

實に、予が、霞と同じき水蒸氣の作用は、獨り春のみにあらずして、何れの季節にもあり得べきものなるを知り初めたるは、此時にてありたる也、之を始めとして常に風景に注意したる結果
霞と臙とが同一の作用にして、而も相伴ひつゝ、何れの季節に於ても見るを得べきものなるを確め、同時に

予と季節の
開始の何れ
に得なれと
たる在の處

日本の風景の特に美なるは、此霞と臙とを衣装となすに由れるものなるを定むることを得たり。

なほ、怪奇或は幽深を以て勝るの風景は格別として、既に述べたる如き特殊の日本の風景は、殊に此霞と臙との衣装を必要とし、これあると無きとに依つて、同一の風景に凡と非凡との別を生せしむること、林の灣の例にて明かならずや、而も、日本の風景の特に尙ふべき點は、怪奇にあらず幽深にあらずして、一見平凡なるが如くなるの中に無量の含蓄を有するそれなりとす。

◎太平洋岸と日本海岸

其一 兩面の地理的作用

日本の風景は、太平洋岸と日本海岸とに於て著るしく其趣を異にせり、而も、之を對照すべく最も適當なるは、東海道と北陸道との海岸也。

蓋し、脊梁山脈の頂點を縫うて日本の本州を縦斷し、其太平洋方面の一半を表日本となし、日本海方面の一半を裏日本となす時は、表日本は、暖潮流るゝ太平洋に面して氣候温暖に、裏日本は、暖潮流なく寒潮多き日本海に對して、而も、對岸の大陸との距離遠からず、西伯利亞の氷原雪野を渡り來る寒氣を受くるを以て、溫度著るしく背中合せの表日本より低く、殊に、冬期に於ては其差違甚大にして、裏日本は連日雪霰晴天を見ること稀に、滿地一白に蔽はるゝ

表日本と裏日本

に、表日本は全然之に反して、稀に雨雪を見ること無きにあらずと雖も、概して晴天乾燥に、地上黄褐色をなすを常とす、されど、是れ本州を二分しての總體の比較にして、太平洋岸と日本海岸との風景の比較にあらず、勿論、其風景にも亦氣象が作用する所の差違を認むべしと雖も、太平洋岸と日本海岸との風景の差違は、單に此理由のみにて、説明すべからずして、他に大なる原因ある也。

然らば、开は何ぞ。

曰く、日本は大陸島にして、元、亞細亞大陸の一部分なりしを、中間の地盤陥落して海水浸入したるに由り、大陸と分離して、之と並行したる大島をなすに至りたるもの、即ち、日本海は地盤の陥落したる部分にして、太平洋岸は上古の亞細亞大陸の岸なれば

日本の國土は常に日本海岸に缺けて太平洋岸に延び行く傾きあり

とは、地理學者の云ふ所なるが、實際、歴史あつて以來にても、日

日本海は地盤の陥落したるの地

安宅の遺址
は現在海の中

東京の地盤
は往古海底

本海岸の缺損を見るべき事實少なからずして、かの辨慶が勸進帳を讀みて通りしてふ安宅の關の遺址は、今や岸より數町離れたる海中に在りと云ふのみならず、又、羽後の海岸に内道川てふ漁村あり、内道川ある以上は之に對する外道川も亦無ければならぬ筈なるに、此村の外は直ちに海なるが、古老の傳説に依れば、往昔は道川村に二つの部落ありて、海岸に臨み漁人を住ましむるを外道川と呼び、外道川とは一丘を隔て、海岸に遠ざかり、農民を棲ましむるを内道川と云ひしを、いつの世にか外道川は海中に陥没して跡方も無くなり、直ちに内道川のはとり迄海は迫るに及びたりと云へり、なほ、是等の例は日本海岸至る所に求むることを得べし。

一方の太平洋岸には又之に反せる多くの事實あり、第一、東京の地盤は往古海底にして、隅田川の海に通ずる口は今の千住あたりなりしことは、千餘年前の古き地圖を模寫せるものゝ今残れるに依つて、知ることを得べく、今の言問圓子の邊は、肯て

名にし負はひ言問はん都鳥我が思ふ人はありや無しやと

と云ひし古への渡船場にあらず、業平が渡りたるは、千住より上手なりしに相違無し、而も、往古の海底變じて今の大都となりたること、單に隅田川の沖積作用の爲めとのみと云ふべからずして、亦、日本が日本海岸に缺けて太平洋岸に延ぶる總體の作用に一致せる結果ならずとせざる也、此兩面の作用は、地理學上の、土地緩漫上昇作用及び土地緩漫下降作用に外ならざるべし、なほ、尾張太古想像圖てふものあり、今の尾張國の大部分は海灣にて、中に大小の島嶼あり、美濃の岐阜は直ちに此海灣に接し、名古屋は海灣に突出したる地骨にて、海暴るゝ時には浪之を越す故、浪越と呼ばれしより、轉化したる名稱なりと云ふ、是亦、單に木曾川の沖積作用にのみ理由を歸すべからずして、東京の地盤と同じく、太平洋岸に一致せる總體の作用の結果なるを知るべしとなす。

此に於て、予は此兩面の地理的作用と一致せる點に、太平洋岸と

尾張の古地圖
を見れば海也

日本海岸との風景の相違せる理由を見出ださんとす。

其二 太平洋岸と日本海岸との差違は最も風景に於て著るし

既に例證を擧げ來りて、日本の國土が日本海岸に缺け太平洋岸に延ぶるの事實を述べ、亦其科學の説く所と一致せるを語りぬ。

即ち、日本海岸は漸次に亡び行く地也、太平洋岸は漸次に興り行く地也、日本海岸は消極的也、太平洋岸は積極的也、日本海岸は、減也、損也、缺也、縮也、貧也、枯也、衰也、瘦也、太平洋岸は、増也、益也、滿也、伸也、富也、榮也、盛也、豐也、双方の地氣を比較するに亦爾り、隨つて、双方の住民の氣風、其生活の狀態、其事業、其行動、亦之と一致せるを見る、而も
風景に於て太平洋岸と日本海岸との差違を見るべき程顯著なるは無き

也、并は一見にて之を別つことを得べし

其三 太平洋岸の特色

概言すれば、太平洋岸の風景は、温雅和暢にして、伸んびりと緩やかに、豊かに殷やかなる所あり、灣深く、崎長く、濱廣く、村繁く、其屈曲縈廻の多くして甚だしきを以て、對岸に陸地あるにあらずして、至る所、湖中の如き風景をなす、此

海にして湖の如き風景が、太平洋岸の特色にして、其、温雅和暢の趣、潤澤豊富の致は、一に、海岸線の十分に延びて屈曲縈廻の多きより生ずる

也、試みに例を擧げんに、相摸灘は肯て海灣と云ふべき程の所にあらざるに、葉山、逗子、鎌倉、江ノ島、大磯の、其何れの海岸より望むも、右には伊豆の突角長く出で、左は、近く三崎の岬端より、遠く房州洲ノ崎の鼻頭に至る迄を望みて、左右より眼界一面の海を

海に如き太平洋の特色

包擁し、而も、其双手の端の相合すること能はざる断之間には、雲か山かと擬ふ噴煙を帯べる大島を置きて、風景の連絡をなし、大観すれば宛乎たる湖中の趣也、大山、箱根、天城より、大島を掛けて、鋸山、鹿野山に連り、恰も此太湖を圍繞せる一山脈の觀あり、之に加ふるに、富士の半天より下瞰して、湖中の風景に大交渉をなすあり、實に是れ、日本第一の偉觀にして又美觀也、若しそれ、此大觀の一部より更に深く陸地に侵入したる東京灣の、なほ一段湖的風景をなせるは云ふ迄も無く、東京灣より局面大にして其闊きたる駿河灣も、亦三保の松原に出で、富士を望むに至れば、全然湖中の風景にして、而も、富士の姿と色にも何と無く湖岸の物の如き趣あり、湖的趣味津々として人に注ぎ來るを覺ゆ、たゞ、富士の近きに失して、其輪廓の餘りに截然たるを憾むのみ（富士山と風景との關係に就いては、後に予一己の議論あり）、なほ、三河灣、伊勢灣の相連なりて、東京灣より更に大に、而も、東京灣より更に恰當なる

湖的風景を呈するあり、更に西して瀬戸内に至れば、無数の嶋嶼を包含せる雄大なる湖水の趣致、全幅に溢れ、九州にては、有明灘、大村灣、鹿兒島灣等、尋常の湖水よりは却つて多く湖的趣致を發揮せるを見る也、但し、嚴密に云へば、瀬戸内は是等の例以外に置き、別に之を論すべきものなりと雖も、今は後の章に譲ることゝなして、こゝにては唯だ大體の種別に隨へり。

以上は、獨り太平洋岸に限りたるの風景趣致にして、日本海岸に於ては、絶えて之に似たる大觀に接すること能はず、青森灣の風景や、太湖の趣を帶ぶと雖も、是れ既に日本海の範圍以外也、而も湖の如くなるが必ずしも其好風景なる所以にあらず、予は敢て湖沼の風景に重きを置いて、之を標準となしつゝ、海洋の風景の價値を定めんとする者にあらざる。

也、予はたゞ、湖の如くなる程、海岸線の屈曲縈廻多くして、温雅和暢の趣と潤澤豊富の致とを併有せるを太平洋岸の特色となすのみ

而して、之に配するに松を以てす、實に、日本の風景の神髓也

七四

其四 日本海岸の特色

日本海岸は、太平洋岸と全然趣を異にせり、其風景單調にして、海岸線の長く曲線を引くを見る、而も、暗灰色の平沙と斷崖と相連りて限り無く、瘦せて疎らなる松は、皆一樣に海に背いて斜めに立ち、遠くは常に潮騒りに籠められて、晴日もなほ明らかならざるを覺え

風景にゆとり無く、温か味無くして、物皆消え行き、沈み行き、耗り行くかと思はれ、淋しく、哀れに、泣くが如く、訴ふるが如くなる

を見る也、而も

日本海岸の特色はこれにして、風に灰白の色あり、其過ぐる所岸頭の光景恰も影の如く弱くなり、雲慘み煙愁ひ、海は大なる

大荒野なる水色の
如き日本海岸の特色

水の荒野の如く、泛べる舟さへ極めて稀にて、之に對すれば、常に遊子宿を得ざるの情ある

也、八重の霞波を鎖して、而も其霞と波の外に何も無き春の曙、太白星霧に没して、海も共に滅するかと氣遣はるゝ夏の夕、すべて喜ばしき景にあらずして悲しき色也、日本海岸より望めば

何れの部分にても、海の深き所に大鐘の沈み居れるかと思はるゝばかりに、凄く且つ淋しき

感じに打たれざるを得ず。

斯くて、一線に長く連なりて、屈曲縈廻の稀なる日本海岸は、長門より陸奥に至る迄著るしき變化無く、たゞ、陸奥に近づくに随つて、慘澹たる大なる水の荒野の趣を加へ行くのみなれば、何れを捨つるとすべからざると共に、亦何れを特に取るとするを得ざる也、尤も、出雲の中の海、若狭の海岸、能登の北灣、羽後の雄鹿半島等、海岸線の屈曲縈廻多くして、複雑なる風景をなす所無きにあらずと

日本の風景
を取捨てて
何を何れ
の海岸とす

雖も、是等は極めて稀にして、數十里或は百餘里の間に僅に其一を見出だし得べきのみなれば、以て日本海岸の特色とはなすに足らざる也、縦令、是等を以て特色となさんことを要すとも、皆小規模にして、大平洋岸の大觀に匹敵するを得ざるを如何せん。

要するに、日本海岸の風景は

や、大陸的趣致を帶ぶる代りには、荒涼たる胡地の風情を含むを免れずして

それだけ、人をして一種云ふべからざる感興を起さしむとは雖も

太平洋岸のその如く、日本的風景の神髓とは云ふべからず是れ、日本海の幅廣からずして、朔天胡地を渡り來る大陸的色味の風を消化せず送るが爲めにも由れりと雖も、第一、日本海岸を缺損陥没せしむる地理的作用が、其風景を均齊して單調ならしめ、以て一望無際の觀を成せるが故なるを認めざるべからざる也。

其五 太平洋と日本海岸との風景の概念

以上舉げ來りし、太平洋岸と日本海岸との特色を對照せば、一方は、漸次に増殖し延長する地理的作用に叶へる温雅和暢にして潤澤豊富なる風景趣致を有し、他の一方は、漸次に缺損し退縮する地理的作用に叶へる沈鬱悲涼にして單調促進なる風景趣致を有しつゝ、其全然反對なるを知ることを得べし、故に予は、日本の國土が日本海岸に缺けて太平洋岸に延ぶるの地理的作用は、之を風景の上に見て最も顯著なりと云ひし也。

されば、芭蕉に

松島は笑ふが如く、象潟は怨むに似たり

と云はれし、其象潟は百餘年前の地震の爲めに地形を變じて、今は唯だ一面の水田を見るのみなりと雖も、往昔は波淺く魚指すべき間に松！合歡樹と櫻とを生じたる九十九の島嶼ありて、松島に匹敵す

太平洋の風景の概念に依つて
太平洋の風景の概念に依つて
太平洋の風景の概念に依つて

るの絶景と稱せられ、而も松島が、太平洋岸ながら古への奥州の部に、房州以西の風景の和暢なるに比すれば、悲涼の趣致を含むこと多きに拘はらず、なほ象潟に對しては、笑ふが如く人を喜ばしむる風景たる位置を占めしと云ふを以て、如何程象潟が悲涼なる日本海岸的特色を發揮せしかを推測するに足るべく、此の如く、細密に注意し來らば、太平洋岸と日本海岸との風景の差違を、種々の點より見出だすことを得べき也。

太平洋岸と日本海岸との風景の差違を概念に依つて現はさんには、太平洋岸は、輪廓圓みを持ちて穩かなる丘陵を載せたる沙嘴長く出でつゝ、深く海水を抱けるもの、左右より層をなして、所々に繁茂蒼潤なる松の叢を帯び、灣の外には將に睡らんとする島あり、島の外には既に睡りたる山あり、沖には舟多く、岸には家繁く、而して、水と天とをおしなべて、満眼の畫面に塗るに、物を蒸し柔らぐるが如き薄紫なる空氣の色を以てせるもの

にして、之に對し

日本海岸は、長き弓形をなして其間に曲折出入無き海岸線に傍ひつゝ、たゞ茫漠と際涯無き海面あり、之に薄き霧の如き潮壘り立籠め、冷かなる色せる雲の切れの其間にはのめく外、沖には舟少なく、岸には家稀に、單調なる砂丘に、一樣に海に背ひて斜立せる松の、瘦せて固く、黒みて乾きたるを見る、空氣は鼠色と云はんよりは寧ろ鉛の如しと云ふべく、色の中にも物を壓するに似たる重く沈みたる趣を含

める也。

故に、日本海岸の風景には硬く冷かなる趣ありて、太平洋岸の風景には柔かに温かなる趣あり

太平洋岸は秋もなほ春の如く、日本海岸は春もなほ秋の如くなりとす、而も、秋もなほ春の如くなる風景の愛すべきのみならず春もなほ秋の如き風景亦味ふに堪へたり、兩者各々特長ありて、何

高人愛せ
らるる風景
に少数の人
は味を
風は

れを取り何れを捨つるとなすべからざる也、たゞ、陽春白雪の調は和する者稀なるが如く、秋もなほ春の如き風景の愛すべきを解する者は多しと雖も、春もなほ秋の如き風景の更に味ふべきを知る者少なきのみ。

されど、少数の人に味はるゝを以て、日本海岸の風景は太平洋岸に勝れりと云ふにあらざる也、光琳の蒔繪ある棚よりは、神代杉の箱に價值ありと云ふにあらざる也。

富士の好本
に於ける日
本風景の代
名詞

◎風景としての富士の眞價

其一 風景としての富士山と日本人

日本の風景と云へば先づ富士山が擧げられ、日本の最も誇るに足るべきものと云ふも、亦富士山の外を擧げず、日本の富士か富士の日本かと問はまほしき程

富士山は日本に於て重要なものとせらるゝ也

富士山と日本人の氣風との關係云々は姑く之を問題外として、單に風景の上に於てのみ富士山を見るも、殆んど

富士と云ふは日本に於ける好風景の代名詞なるかの觀

あり、富士見ゆとさへ云へば、其地は再度の詮議を経ずして直ちに好風景の部類に編入せられ、而も、富士が如何様に見ゆるかを問は

れざる也、甚だしきに至つては、山の間より僅に一寸一分ばかり頭を出だして、目を持廻はりて搜したる末に、やうくそれと見出たさるゝが如き富士にても、なほ風景を成す価値あるものと信せられ寧ろ、少しく見ゆるを以て却つて特殊の風景として重きを置かるゝ一面もある也。

富士見ゆとさへ云へば、風景を批評すべく鑑賞眼を開かざる前、先づ以て之を好風景と定むる意思動き、而して後に眼を開くは、日本人の常也、是れ二千年來の習慣也、日本人代々の遺傳也、日本人の第二の天性也、日本人は

富士病者也、富士狂也、富士に酔はされ、富士に魅せられ、富士に迷はされ

つゝある也、日本人と富士山との關係は、迷信者が宗教の宣傳者に對するが如く、初戀の若き者が其戀人に對するが如くなる也。

舊時代の畫家、及び、今日に於てもなほ新空氣の吸入を厭ふ舊式

日本人は富士狂也

なるそれ等の者には、好んで富士を描き、或は好んで其描く所の風景畫に富士を添加し、以て、富士さへ描けば、其畫は鑑賞に價するものと自信するの意を示すの風をなせり、何ぞ獨り畫家のみならん、文士も亦之と揆を一にせざるにあらざる也、加之、舊時代の畫を愛し文を好む徒、及び、今日に於ける舊式なるそれ等の者にも、亦一般に、富士を描ける繪畫、富士を主題となせる詩歌文章は、其巧拙を批評する前、先づ賞美すべきものとして迎へらるゝ事實あり、甚だしきに至りては、狡黠なる徒ありて、富士の輪廓に似たる形に石を刻み、或る長時間之を急流中に放置して、人工の痕跡を自然のものゝ如き形に變せしめ、之を「富士石」と呼び、富士山より發する溪流の中より得たるものと吹聴するに、世人争うて之を購ひ、之を盆中に置きて愛玩する也。

而も、古より今に至る迄、富士山を描きたる繪畫は概ね俗惡也、寧ろ、一として俗惡ならざるは無しと云ふも過言にあらず、十分の

富士の詩歌と士
山な文、か
主なるもの頭
に如し
なせ
る章
羅の
か
つる
鉄
た
天
は
の
新
詩
歌
と
士
山
な
文
、
か
主
なる
もの
頭
に
如
し

手腕を有せる畫家と雖も、一たび富士を描くに至れば、平生の靈筆は毫も認むべからずして、一見嘔吐を催すべき臭氣を帯べる、俗悪陳腐維れ極まるものを成さざることを稀なる也、詩歌文章亦爾り、予は敢て、富士を主題となせる古今の詩歌文章を盡く見たりと云はず、されど、其人口に膾炙せるものは大抵之を知つて居る積もり也、而して、何れを見ても陳腐俗悪ならざるは無く、たましく陳腐ならざるものあるかと思へば、奇を弄して却つて益々俗悪の趣致を加へ、饅頭を天狹羅にしたるが如く、其しつこくあくどきこと、人をして嘔吐を催さしめずんば已まざらんとす、而も、獨り富士を主題となせるものゝみならず、僅に一端に富士を帯びてさへ、其詩歌文章の全體が俗悪化されたる例多きを不思議なる。

文晁の富士を描きたる畫を少なからず見たり、何れも有名のものと思はるゝ程、揃ひも揃うて俗悪なるものゝみ也、北齊の富士百景

とか云ふものに至つては、俗悪の標本、いやらしき模様、一見身靈ひを生じ、再見嘔吐を催す、其他、單線にて富士の輪廓を描きたる所謂名畫には、全く繪にならざるもの多し、殊に、舊式の畫によくある「富士越しの龍」なるものに至りては、夕立雲の異觀より思ひ附きたる意匠なるべきが、左無きだに俗悪なるものに、更に俗悪の上塗りをなしたる如く、念の入りたる悪い洒落也、たゞ、橋本雅邦の手に成りたる「富士越しの龍」あり、夕立雲を描くを主眼として、龍はたゞ雲間にそれらしきものをほのめかしたるのみ、最も山と雲との形及び色の配合に苦心したるものにて、これのみは、毫も陳腐俗悪ならず、人をして畫の妙に打たるゝを得せしむる也。

西洋畫家が、皆申合せたる如く、富士山と松とを恐ろしきものゝ如く避くるは、共に、西洋人の描きたる粉本無きが重なる理由なるべけれど、一つには、日本畫に於ける俗悪なる富士のみを見るに慣れたれば、其轍を躡みて、油繪具に俗悪の上塗りをなすことを免

れんとするものなるべし、果然、日本に於ける西洋畫家の高名なる者は、流石に伶俐にして富士を描かずと雖も、一段下りたる者の中に盲蛇的先生ありて、之を塗り附くるを敢てすること無きにあらず以て、三角形に切りたるブリキ板にペンキを塗りたるものを畫布に貼り附けたる如き、俗悪無比なる細工を成す也。

中村不折の畫にて、本田種竹か誰かの漢詩を添へたる富士畫帖とか云ふものありしを記憶す、毛筆を用ひ線のみを描きたる所謂漫畫なるものにて、西洋畫と日本畫との合の子の如きものなれば、これぞ純然たる日本畫及び西洋畫以外、或る一種の機才を以て、富士の妙趣を發揮し得たるものならんと思ひの外、矢張是も亦俗悪の部類たるを免れずして、極端に云へば、普通の富士を描きたる畫は、肉も皮もある俗悪なるが、これは骨ばかりの俗悪也。

されど、繪畫は此所に其俗悪さ加減を寫し來ること能はざるに、詩歌文章に至りては、直ちに其如何程俗悪なるかを示し得るの便宜

あり、小島烏水は能く富士山を主題となすことを好む文章家なるが、其作る所概ね斬新ならんとして饅頭の天麩羅を掲げ出すの部類にして、同じ手に成りたる鎗ヶ嶽に就いての作などよりは痛く劣れり、蓋し、俗悪なるもの獨り烏水子が富士山を主題となせる文に限らず、古への名文と稱せらるゝ伊勢物語など、更にく俗悪なる形容を用ひて、富士を描かんとあせりたる痕あり、曰く

富士の山を見れば五月の晦日に雪いと白く降り
 時知らぬ山は富士の根いつとてか鹿の子斑に雪の降るらむ
 其山はこゝに譬ふれば比叡の山を二十ばかり重ね上げたらんは
 どして形は鹽尻のやうになむありける

實に是れ、日本に於ける詩人中の詩人なる業平の手に成りたるものに似合はぬ、俗悪且つ愚劣なる駄文凡歌にあらずや、第一、五月晦日は今の六月末か七月初めなれば、殘雪のなほ多きは當然にて、これを鹿の子斑と形容したるは好けれど、鹿の子斑は残れる雪の景色

にして、今現に降りつゝある雪の有様にあらぬに、人に強き感じを起させんとてか、それとも眞實左様に思ひてか、現に雪の降りつゝあるもの、如く云ひ倣したるが、抑も愚劣至極の態度にて、更に其山の高さと形とを云ひ現はすべく、比叡の山を二十がかり重ね上げたるの、鹽尻に似たるのと云ふに至つては、折角の富士山も滅茶々々にて、此上俗了されんやうは無し、流石の業平も富士に逢ひて面喰らひたるが如し。

扱又、こゝに人口に膾炙せらるゝ石川丈山が富士を詠する詩あり曰く

仙客來遊雲外巔、神龍栖老洞中淵、雪如紈素煙如柄、白扇倒懸

東海天

と、狂詩にてさへこれより氣が利きたるものあり、俗惡淺薄もこゝに至つて十二分なりと云ふべし、富士の雪が扇の地紙の如く、其頂の煙は扇の柄の如くにて、白き扇を倒まに立てたるが如くなりとの

形容、いやはや眞面目の沙汰とは申されず、俗臭芬々、鼻を掩ふて却走せざるを得ざる也、而も、多數の俗物は此形容を喜ぶこと非常にして、富士山を扇にたとへたるは好き思附なりと譽め、「白扇倒まに懸る東海の天」とは、容易に云ひ得ざることを苦もなくすらくと詠じ出だしたりと感歎する也、兎に角、いさゝかにても斯る形容を用ひらるべき趣あるかと思へば、富士山其物迄もいやにならんとする也。

田子の浦に打出でい見れば白妙の富士の高根に雪は降りつゝ
(辭句は原歌に依らず百人一首に依る)

の和歌の如き、日本に於ては誰一人之を知らざる者無く、未だ富士山を見ずして、所謂扇を倒まにしたるが如き形の畫と此歌とに依りつゝ、富士山の概念を作る日本人、甚だ多き也、されど、かほと迄有名なるに拘はらず、此歌の中に如何程富士山が現はれつゝありや、卒然として之を口ずさめば、富士の全幅此中に露呈せるが如きを覺

ゆと雖も、扱て目を定めて之を視るに至れば、富士の影だに認められず、手を用ひて隅より隅迄掻き搜すも、富士のカケラにさへ觸れ得ざる也、最初の感想は、たゞ、此歌に刺戟せられて、自己胸中の富士の概念が浮び出でたるのみなるを知る、要するに、此歌の内容は煙の如きものなるのみ。

其他、富士を主題となせる詩歌文章は多しと雖も、高尚がれば高尚がる程、深刻がれば深刻がる程、斬新がれば斬新がる程、奇抜がれば奇抜がる程、徒らに厭や味を加ふるを見るのみ、一々こゝに引例し來るの要を覺えざる也。

此に於て、當然一の疑問を生せざるを得ず、**開は** 富士を描く繪畫、富士を主題とし、若しくは富士を含有する詩歌文章の、殆んどすべて俗悪なるは、本來富士其物が俗悪なる趣味に一致する山なるが故か、**將た、古來富士を描きし畫家、富士を主題となし、文士は、皆俗悪の徒なるが故か、或は、古**

來の文士畫家が未だ富士を觀望する方法に通せざるが故かと云ふ也。

乞ふ先づ、日本國土と富士山との地理的關係を述べ、次に、風景としての富士山の眞價を定め、而して後、此疑問に明瞭なる解答を與へん。

其二 日本國土と富士山との地理的關係

活火山の目覺ましきものこそなければ、淺間、阿蘇を始めとしての半死の火山と、富士を始めとしての全死の火山と、兎に角噴火山と呼ぶべきもの、數に富めること、日本の如きは稀にして、全國到る所、圓錐狀に近き尖りたる山を見ざるは無く、而も

其中最も形の整うて且つ高さの秀でたるは富士に外ならずとなす且つそれ、富士山が地上に發生したると、其占めたる位置とは、自然に日本の國土に對する或る重大なる意味をなせり。

富士山は日本列島の中心点を示す徽章として、日本の國土の結合を締め括る所のピンとして存在する也。

富士山は、日本の國土の中心点を示す徽章として、日本の國土の結合を締め括る所のピンとして存在する也。

九二

樺太山系北より來り、崑崙山系南より來りて、日本の國土を形造り、其相近づき相迫りて横に接合線を描きたる所、富士火山帶東方の海中より起りて、樺太、崑崙兩山系の接合線の上を轟々と固く纏ひつゝ西に走り、以て南北兩日本の結合を成就せり、されば、富士火山帶は日本の胴を引締むる帯にして、其本州を横断せる一線は日本の最高地に、之を以て日本を南北に兩分し、双方の天然及び人事に著るしき差違わらしむ、而も、富士山は此最高地中の最高點たると同時に、日本の最高點にして、特に圓形の周邊を有しつゝ卓出し人をして、一見其日本國土を締め括れる中心點なるを知らしむる也。なほ、富士山は、元と地火の爆發作用に依りて海灣中に噴出したる岩石の堆積なるべく、現に、富士山の後方なる甲州方面に、古へ

の海岸と認むべき土質の部分あり、嘗つて其所より鯨の化石を發掘せしことさへあり、尤も、孝靈天皇の第四年に富士山一夜に噴出せりとの傳説あれど、开は多分、其以前は猛烈なる噴火作用が氣象に變動を興へて、山の全體常に雲霧に鎖され、曾て頂上を示したることも無かりしを、孝靈の四年に至りて、雲霧や、薄らぎたる間より頂上を現はせるを見るに、それ迄想像にも及ばざりし案外の高所に在るより、驚歎の餘り、或は一夜に噴出せるにあらずやと怪み訝りたる、當時の人の感情をば、文字無き時代の事として、幾代も語り傳へらるゝ間、何時しか轉化して事實とせられ、遂に後の修史の材料に採用せらるゝに及びたるものなるべく、富士が海灣中に噴出したる山なることは確實なれど、开は、有史以前、寧ろ人類發生以前、如何程古き事なるか測り知られず、而して、甲州方面に見出だされたる海岸の遺址も、富士山の噴出に連れて上昇したるものなること、人の身に塵物を生ずれば、其周圍の肉も共に高くなると同一の事情

九三

富士山以外の
富士山以外の

富士山以外の
富士山以外の

なるべき也。

斯くて富士山は、風景としての其價值を論せらるゝ前、先づ南北兩日本の結合が成就されたる天然の大紀念標として、人類の歴史より幾倍古き歴史的物件を、吾人に仰がしむる點

に其偉大なる價值を認めらるべく、小富士、寶永山、小御嶽等の贅瘤を微瑕とするも、其形狀の幾何圖的に均齊せると、臺灣を除きたる舊日本に於ての第一の高地點なるを以て、之を風景に屬せるものとなさずして、風景以外の方面に於て存在の理由を有せるものとなすが、妥當なるべく思はるゝ也、而も、實際富士山を紀念標となす所の富士火山帯が日本國土に及ぼしたる結果は、日本の歴史と大關係あるもの也、樺太山系と崑崙山系との相近づき相迫る所、元來中間に海峽ありて、太平洋と日本海とを連絡せしめつゝありしに相違無し、故に、今日若し往古の地理的狀態を持続せば

南北兩日本は對峙の形勢をなして、日本歴史の發展を、今日の

結果あるに至らしめざりし

やも知れず、英國政府が愛蘭問題の爲めに悩まざるゝは、本嶋と愛蘭との間にセントマヨール海峽あるが故にして、而も其海峽の幅の廣さが故ならずや、愛蘭は、もと中間の土地の陥没に由りて本嶋と分離したるものにして、なほ、日本に於て四國及び九州が本州と分離したる理由に齊しとなす、故に若し、愛蘭と英國本嶋との距離が、日本の九州と本州との距離の如く甚だ近きものならば、愛蘭問題は極めて容易に解釋せらるべき也、四國の如き、本州を距ること幾に九州のそれより遠きに由りて、根本的に政府に反抗するの人物を出だし易きを見よ、若し、富士火山帯の噴起無くして、南北兩日本の間に、相應の幅と深さとを有せる海峽を存せる儘、人類發生以前より今日に至らしめば、日本の歴史は、必ずや、より多く波瀾を帯びて、或は、金甌無缺の摸範的帝國たる事實に影響を及ぼすこともありしならん、されば

富士山は獨り南北兩日本の地理的結合に對する紀念標なるのみならず、亦、金甌無缺なる模範的帝國の成立に對する紀念標

と云ふべき也、是れ、事實を基礎となせる言也、乞ふ、漫然たる國最負の感情的空言と同一視する無からんことを。

なほ、其頂上を以て日本に於ける最高の氣象臺となすの利、之を以て日本に於ける最高の展望臺となして四邊を觀測するの益、航海者に便する自然の大目標としての効、附近十數州の住民に供する自然の晴雨計としての驗、其他、之を仰ぎて崇高偉大なるに打たれしめ、之に登りて天地を小なりとなすの意氣を起さしむる等の、日本の山として國民に與ふる感化、皆是れ、風景以外に於て富士山の存在を認むべき理由なる也、然るに

世人は多く、風景以外に於ける富士山の價值と、風景上のそれとを混同して、其間に限界を設けざるが故に

風景上の價值も、風景以外の價值も、共に明らかならず、之が爲め

世上の混同を以て、世人は富士山の風景と風景上のそれとを混同して、其間に限界を設けざるが故に

に、漫然其輪廓を模索して徒らに歎美の情のみを現はさんとする、俗悪なる繪畫及び詩歌文章を生ずること多く、終には、神經質の輩をして、富士其物に對しても悪感を懷くに至らしむるを免れずとなす。

此に於て、風景としての富士山の眞價值を論ずるの機會に到着したり。

其三 風景としての富士山の眞價值(上)

風景としての富士山は、一應の見やうに於ては先づ俗受の部類たる也。

第一、其形状の餘りに整齊したる、語を換へて云へば、餘りにきまり過ぎて型に嵌まりたるが面白からず、すべて

風景は其線の幾何圖的に整齊せずして、不規律不整頓なる間に或る調和配合を有するを、價值となす

風景上の價值も、風景以外の價值も、共に明らかならず、之が爲めに

富士山は獨り之に反し、幾何圖的に整齊せる形狀を以て其存在の價値を認めらるゝ也、白扇倒まに懸るの狀と云ひ、鹽尻の如き形と云ふ、其形容の俗惡淺薄なること言語道斷なりと雖も如何せん、之を望むの距離及び位置と、其日其時の氣象上の作用とに依りては、富士は全く、白扇倒まに懸ると云ひたく、鹽尻の如しと呼びたき、型にはまりたる形狀色相を呈すること無きにあらざるを、されば、かゝる形狀色相を好き見附け物となして、得々と之を賞讚し詠歎したる業平、丈山が俗惡さ加減は憫笑すべしと雖も、斯く云ひたる形容は當らざるにあらざる也。

予も亦、平生富士山に注意を拂ふこと人に劣らざるを自信する者也、而して丈山、業平等が眼に觸れしと同様の形狀色相に觸れしこと屢々ある者也、一體に、駿河及び甲斐、即ち最も富士に近き所より望むの富士は、あまり結構なるものにあらず、之を觀る眼の位置近きに過ぐるを以て、其幾何圖的形狀殊に著るしく、加之、富士の

駿河及び甲斐に於ける富士の風景の價値は、其日其時の氣象上の作用に依りて、眞に美的に鑑賞し得らるゝこと無きにあらずと雖も

み天地に塞がりて、周圍の風景との調和配合宜しからざる也、尤も駿河及び甲斐にても、高き所に位置を占めて、周圍の大觀と一致する富士、即ち、廣大なる畫面の一部分を領する富士として、之を見るときは、其日其時の氣象上の作用、語を換へて云へば、前に述べし所の、水蒸氣の風景に於ける適度の作用に依りて、眞に美的に鑑賞し得らるゝこと無きにあらずと雖も

駿河の平地より仰望する富士、甲斐の山間より頭部或は半身を見出だすの富士は、共に風景としての價値多きものにあらずとなす。

又、或る冬の晴れたる夕、向島の枯野の趣を尋ねての歸途なりき、勿論、今の向島には枯野の趣も何も残るものにあらずして、これは十年以前の話なるが、三圍のあたりの土手より、燈火燦きはじめる淺草の岸を見渡したる所、夕燒の色褪めて紫より黒に變じながら、なほ薄明りの殘る西の空を負うて、待乳の森、觀音の塔、扱ては千

家萬家の立並ぶ屋根等、濃き墨にて描きたるが如く眺めらるゝ中に、不思議や、いつもあらぬ所に、一際高く挺んじたる大寺の屋根の如きもの見ゆ、淺草寺、本願寺別院などの屋根とて、かほど大きからず、且つそれ等の見當とは異なれば、いつの間にか斯る大建築物が出来たるならんと、東京に居て東京の事情に通せざる我が迂濶を嘲りつゝ、なほも眸を定めて熱視したる所、こは如何に、一刹那毎に加はり行く夕闇に連れ、此屋根のみは、他の屋根と異なりて、見るく色薄くなり、次第に遠ざかるやうになり行く也、愈々不思議とよくく見直せば、始めて判りて、思はず呀ッと一聲、是れ富士山にてありける也。

されど、其後再三の經驗に依りて、或る夕暮の氣象の作用の爲め東京に於ては、富士山が人家の屋根と見擬はるゝことの珍らしからぬを確め得たり、遠き富士山が、東京の市中に立並びつゝある人家の屋根と同様の觀を呈すとは、實に奇とすべき現象にて、頗る評判

に價するものなりと雖も

これとて、風景以外の現象に於て奇異なりと云ふべきのみにて風景としては毫厘の價値あるものにあらず、寧ろ風景のふちこはし

也、然るに、世間多數の人は、かゝる奇異なる現象をも、風景としての富士の賞讃すべき所以と混同して、無暗に奇と呼び妙と唱ふるを遺憾なる。

又、昨冬の事也、多摩川上流の地に赴くべく、友と旅を共にして立川より青梅鐵道に乗換へたるが、殊に好く晴れたる朝にて、左の方車窓の外に横はる連山の上に、富士の頭部を見出だしたり、富士を見出だしたりてふ事は、何と無く勇ましく喜ばしきものなれば、友と共に暫くは一心に見入りたるが、遽て眼中の風景を批評するの意起りたり、而も、云ひ合はせたるが如く

か•ら•見•る•と、富•士•も•俗•な•山•だ•な•ア•と、友•も•予•も•一•時•に•唇•を•破•り

頭部以上或は胸部
以上或は胸部以上
或は胸部以上或は胸部以上
或は胸部以上或は胸部以上

たり、爾り、前景の連山波をなして横たはりつゝ、一方は巒と縁との不規律なる山嶽相重なりて、云ふべからざる調和配合の妙をなし、田野、樹林、流水、村落の風景と一致して、薄白き朝靄の中に浮き出でたるが如くなるに、獨り富士のみは輪廓截然として、例の人家の屋根の如く、其色の白さも何か粉にても塗りたるかの趣あり、唯一つ人工的趣致を呈して、毫も其前景の自然なると調和せず、甚だいや味に見えて、風景としては寧ろ無之もがなと思はるゝ也。

山間、或は連山の上に、其頭部、或は胸部以上を露出するの富士は

大抵、人工的趣致を呈していや味なるもの也、之を賞するは唯だ其珍らしきを愛づるのみ、露はれ方の珍らしきと風景の好きとは全く別也、混同すべからず、されば富士山は、遠くより望めば必ず好しとも限られぬ也。

相州海岸より望む富士は、何れよりするも皆美なれど、それにて

さへ、其日其時の氣象の作用にては、輪廓の幾何圖的に截然たる點のみ目立ちて、周囲の風景を壓倒し、全くぶちこはしになることあり。

以上列擧したる所に依れば、富士山は風景として左程價值あるものにあらざるが如し、人工的趣致即ち俗悪なる趣致を呈して

風景を壓倒し、或は破壊する

場合多く、偉大なる、或は奇異なる感想を觀る者に與ふることは事實なれど、开は、風景の範圍外に超出したる偉大或は奇異にして、風景の好きとそれとは混同すべからざるものなるを、一般多數の人は此區別に注意すること深からず、之を一樣に見做し、たゞ漫然と賞讚し詠歎するの習ひをなすに至れるの事情、略ぼ讀者の了解する所となりたるを信ず。

其四 風景としての富士山の眞價值(中)

富士山の眞に世界無二なる所以は、其丈高くして、輪廓截然と整齊し、眞個に八面玲瓏にして、何れより之を望むも倒扇狀をなせるにありとせらる、此點に於ては、南米のコトパツキシ火山、墨西哥のポポカテペートル火山等の、所謂倒扇狀に似たる圓錐形を以て稱せらるゝありと雖も、幾多の缺損と全體の不調和とは、到底是れ等をして我が富士山に匹敵するに足らざらしむる也、圓滿なる模範式火山の形狀を損ずる作用は、寄生火山の噴起と、巖石の崩壊とにてコトパツキシもポポカテペートルも之が打撃を受けざる無きに、獨り我が富士のみは、小富士、小御嶽、寶永山等の寄生火山ありと雖も、未だ形狀の美を損ずるに至らず、巖石の崩壊も亦未だ過度に入らずして、形狀甚だしく瘦削せず、なほ適度の肉に山の美を保てりと、是れ、漠然たる舊式の感情的富士山讚美論と選を殊にする根據

ある所説にして、亦證者をして耳を傾けしむるに足るもの也、されど、要するに是れ、圓滿なる形狀の模範式火山と云ふ科學上の價值を知らしむるものにして、風景としての價值を知らしむるものにあらず、之を聞いて、得たり畏しと、さればこそ富士山は世界第一の美觀を呈するなれと自負するは、亦是れ、新式なる科學的實説を舊式なる感情的空論の中に混入せんとする者のみ。

足柄の神の御坂を越え來れどまだ富士の根は雲井なりけり
の和歌、人をして、一唱富士の崇高偉大を眼前に描き出だして、自ら志氣の高く擧がるを覺えしむれど、これとて、富士の高く大なるを擬人的若しくは擬神的に讚美するものゝみ、肯て其風景觀にはあらざる也。

予は敢て云ふ、富士山の崇高偉大にして圓滿なる形狀の模範式火山なるは

確に世界無二なるに相違無しと雖も、**開は、科學上の價值にし**

富士山
の眞價
値は科
學上
の無二
なる世
界に

問は界富
題情無士
神二山
上なの
のる世

俗風て滅今
を景富じよ
生上士てり
ぜの山始肉
ん價にめな

て風景上の價値にあらす

と、同時に、其崇高偉大にして而も圓満なるは、人をして之を仰いで自ら志氣の高く舉るを覺えしむるに足り、此點に於ても

確に世界無二なるに相違無しと雖も、是亦、精神上の問題にして風景上の問題にあらす

となす。

風景上の物としての富士山は、却つて、一般多數の人に賞美せら

るゝ所の

適度の肉を保てる圓満なる形狀が宜しからざる

也、若し富士にして

巖石崩壊して今より約三分の一の肉を減じ、瘦削骨立、天を刺すの戟の如くなるに至らば、眞個に風景上の價値を生じて

始めて云ふに足るものならん、之に依つて、其輪廓の截然と幾何圖的に整齊せる人工的趣致を脱し、不規律なる曲線の間美的調和を

生じ來り、観る者の距離及び位置、氣象上の作用等の影響に強き支配を受くること無く、何れの時何れの所より之を望むも常に美なるものとならん。

而も、すべての死火山の丈高さものと運命を同うする富士山の岩石は、漸次に崩壊して其皮肉を剝落せしめつゝあれば、著るしく目には立たざれども、年々幾分かづゝ瘦削し行くに相違無く、今より幾世紀かの後には、眞に風景上の價値を有するものとなることを得べけん、それに附けても、近年猫も杓子も富士登山を企つるの風を起したるは、一面より見て、富士山を俗了する苦がくしき事なりと思ひしが、人の登ること多ければ多き程、富士の岩石砂礫の崩れ落ることも亦随つて多ければ

予は、富士の瘦削に力を加ふる作用として、益々登山の風を盛ならしめん

ことを希望す、就中、騎馬にして登る者を最も賞美せん、何となれ

ば、二本足より四本足の方が、多く山の瘦削作用を助くれば也、手
 嘗つて富士に登りし時、砂走りを駆け降りて大に愉快を感ずると共
 に、一足を置く毎に幾升かの砂礫が下方に崩れ行くを見て、これに
 ては、富士の身が瘦せ行くなるべしと、金錢を浪費するよりも惜し
 く思はれしが、今より願れば、甚だ馬鹿々々しき氣遣ひにて、却つ
 て、予も亦多少富士山の瘦削作用に力を加へ得たるに満足すべきを
 覺ゆる也。

瘦削して以て風景上の價值を成し得たる山の例を求むれば、蝦夷
 富士と稱せらるゝ後志の後方羊蹄山、同じく利尻島の利尻富士等を
 擧ぐることを得べし、富士山の形狀整齊せるを以て風景上の價值と
 なす者は、予が言に反對すべしと雖も、其規模こそ富士山に比して
 小なれ、瘦削して以て奇峻秀抜の致を成し、其輪廓の曲線の幾何圖
 的ならずして繪畫的なること、其周圍の風景と調和せること、苟く
 も眼ある者は之を認むるに吝ならざらん、富士山の偉大崇高を以て

のび蝦夷
 例利尻
 尻富士
 富士及

して、其瘦削せること蝦夷富士の如く利尻富士の如くなるに至り、
 而も、其輪廓の幾何圖的なるを變じて繪畫的ならしめば、今のそれ
 に比して、其風景上の價值數段を加ふべきや必せり。

但し、或距離或位置よりするの觀望と、或日或時の氣象の作用と
 の一致よりして、眞個に倒扇狀に見え、鹽尻形に見ゆる所の、輪廓
 整齊せるより來れる富士山の人工的趣致は、風景として鑑賞に價す
 るものにあらざること、既に論じたるが如くなりと雖も、此俗的趣
 致が俗受をなして、一般多數の人に愛好せられ、語を換へて云へば、
 一般多數の人に怡樂を與ふるなれば

俗的趣致に於ての富士も亦存在の價值ある
 を認むべき也、されど、是れ風景としての富士山の價值を成す所以
 にあらず、爾り、斷じて是れ風景としての富士山の價值を成す所以
 にあらざる也。

其五 風景としての富士山の眞價值(下)

願れば、予は多く富士山の悪口を云へり、此に於て、翻つて之を稱揚せんことを思ふ、されど是れ、悪口を云ひしが氣の毒さに其埋め合せをなさんなどの、感情上の問題にてはあらず、其幾何圖的に整齊せる輪廓を有する形状は、或距離或位置と或日或時とに於て、觀者に人工的趣致を感せしむると共に、他の或距離或位置と或日或時とに於ては、觀者に自然的なる風景上の美感を與ふるを以て、既に其一面を説き了りたれば、今や更に他の一面に及ぼさんとする也、之を要するに

富士山は本來の形状に於て、繪畫的にあらずして幾何圖的なるを以て、之を觀望するの距離及び位置と日及び時とが、其幾何圖的形状を著るしく視覺に觸れしむれば、以て風景を壓倒し、若しくは破壊すと雖も、又爾らざる場合ありて、よく周圍の風

景と調和配合をなす

と云ふ也、即ち

富士山の眞價值を成す時

富士山が風景上の價值を成すは、其幾何圖的形状が著るしく觀る者の視覺に觸れざる場合

也、此に於て、次には、如何なる場合がそれなるかとの問題に移らざるを得ず。

先づ、觀る者と富士山との間に或る約束無きを得ざるを知るの必要あり、而して

其約束を媒介するものは水蒸氣

に外ならざる也、少なくとも富士山の腰部以上を見得る位置にして、而も、其周圍の風景を廣く眼界に收め得ると共に、其色相を適度に眼に映せしむべき距離を保ちたる上、之に水蒸氣の過不及無く作用する時は、則ち、幾何圖的形状が著るしく觀る者の視覺に觸れずして、富士山は始めて風景上の價值を成す也。

此理由よりして、予は、相州房州一帯の海岸を以て、最も富士山を眺望するに適せる所となす、三保の松原、田子の浦、箱根の或部分、十國峠等、亦可ならざるにわらずと雖も、是等は近きに過ぐるの嫌ひあり、水蒸氣の作用が極めて宜しきを得たる或る稀なる場合を除くの外は、幾何圖的形狀の視覚を刺戟するを如何ともする無き也。

而も、相州房州一帯の海岸と雖も、江の島はやゝ近きに失し、北條、館山はやゝ遠きに過ぎたり、中に於て

遠きに過ぎず近きに失せざるを相州三崎となす、三崎の歌舞島、及び、城ヶ島燈臺を以て、絶好の富士眺望臺となす

也、予は、すべての土地を比較したる上に敢て斯く斷言す。

三崎の城ヶ島及び歌舞島は、島其物として肯て風景上の價值あるものにわらず、されど、富士を眺望すべく適當の地なるに由りての價値は、如何なる好景の地にも劣るものにわらず、獨り、此地ある

に依りて富士が世界無比の美觀を發揮し得るのみならず、亦

世界無比の美觀なる富士を中心となして、八面に開展する海山の△大景を領し得る點に於て、此地を日本第一の好景

となす也、なほ、此地を中心として相州房州一帯の海岸を日本第一の好景となすの理由は、後に章を設けて詳説すべければ、讀者未だ之を見るに至らずして、輕々しく予が言を是非すること勿れ。

但し、此地の風景と雖も、水蒸氣の作用適度に至らざる時は、十分に其價値を發揮し得ざること勿論也。

なほ、必ずしも相州房州の海岸に限らずして、これより近き所にも、又遠き所にも、山にても、野にても、湖にても、苟くも富士を觀望し得る地ならば、其水蒸氣の作用宜きを得たる時に於て、此山の美觀を領することあるものと知るべし。

此に於て、前に富士山の美的ならざる場合を列舉せしに對し、これより記憶に残れる所に據りて、予が富士山の美を感せし場合を列

舉せん。

嘗つて、三崎に遊びし時なりき、極めて晴和なる冬の一日は、湖水の如く平かなる海上に暮れ行き、城ヶ島燈臺の綠光が金星の白光と相映發し始めてより、殆んど二時間許り過ぎ、大山、箱根、天城等は、濃き墨を含まして横に拖きたる一刷毛の水霧に撫で消され、下界は全く夜の黒幕に蔽はれながら、富士は恰も故らに自己の高さを示さんとするもの、如く、此時に限りて不思議に、痛く缺け損じたる三角塔の如く見ゆる形狀を呈しつゝ、嶮然夜の幕を衝き破りて、腰部以上を天際に挺んで、而も、其輪廓をボカして薄明りを留めつゝあり、予が眞に富士を美なりと思ひ初めしは此時也、而も、予が此時に領せし富士の美は壯美の部類なりき。

次には、優美の極なる富士を見たり、是れ、三崎より徒歩して逗子に向ひし春の日也、海を左にせるや、高き野を行くに、麥の葉緑に菜の花黄なる波をなせる畠の上に、菜の花より蒸し出だされたる

霞が固まりて成れるかとはばかり、糺糊として空に印せる影の如く、卒然として見れば薄鼠に、よくよく見直せば藤鼠とも云ふべき薄紫なる富士を見出だせり、而も、そよ吹く風に、暖き日の氣と共に菜の花の香がムツと匂ひ來る毎に、富士は殆んど見えぬばかりに薄らぎ行く也、此時

菜の花に蒸されて富士の薄鼠

と口ずさみしが、俳句にも何にもならずと雖も、情趣の忘れ難きものあるを以て、今もなほ記憶に存せり。

東海道の草鞋旅を試みし時也、二月下旬なりき、元箱根村より箱根町に向つて、蘆の湖のはとりを行くに、老樹の缺くる所、滿眼の杉の紫と茅の黄との外、忽ち眸を奪ふ一大白物あり、驚いて仰げば、何と云ふ山にや、其形富士によく似たるが、全面凹凸も見えぬ程雪を被り、而も、人をして畏敬せしむる富士の崇高偉大は無くして、雪の色も臙なるばかり、深くく霞に包まれ、藤紫に染めし真綿を

打ちほらけさして富士形に積みたる如く、極めて近くして手に取られんばかりに、而も、手に取つて握り固めなば小さくなりぬべしとばかりに思はる、予は、何と云ふ山ならんと訝りつゝも、其餘りに床しきに見惚れ、恍然として杉の根元に佇みつゝありたる所、湖面を皺にする漣波は微風と共に收まりて、春意や、動ける薄葡萄酒の湖水に、模糊たる其山の倒影を殘せり、此に於て予は濶然大悟す、豫て聞く所の蘆の湖の倒さ富士は是なりと、斯くて、予は今にても思へり、蘆の湖に倒さ富士を見し人は多かるべけれど、予の如く、好き節、好き日、好き時に之を見たる者は稀ならん。

夏の夕暮、逗子の灣に臨みしことあり、重苦しき厭世趣味の水煙は右方の山の根を呑み、左無きだに陰鬱たる其山は、一段遠くなりて益々陰鬱の氣を加へたり、灣内の水は、見やうに依りては墨汁を湛えたる如くに黒く、又見やうに依りては、それと全く反對せる胡粉を溶きたる如くに白く眼に映じて、毫も水らしき光澤を帯ばず、

此時、灣外には、夕燒の海の空に描き出だされて、桔梗色の江ノ島を踏臺にせる朱鷺色の低き富士の、右方の山の端より覗くが如くなるあり、而も其、灣内の風物と交渉すること能はずして、寒くべからざる濃き灰色の幕の外に在るが如くなるを、他に見るべからざる風景、他に得べからざる趣致となす也、海水浴の人も一しきり途断えて、水煙の中より漕ぎ出でたる一葉の扁舟のみ、畫面の中の唯一つの動く物なるが、此動く物の爲めに、灣内に充滿せる黯慘寂黙がいさゝかにても破らるゝにあらず、却つて益々其氣を人の魂に揺り込むに、幕の外なる富士は、見るゝ黒く紫に變り行きて、果ては山の幽靈の如く物凄きものとなりぬ、人をして投身せんことを想はしむるは斯る夕なるべしと、一應は思ひしが、否、投身せんとする者も此光景に接しては躊躇すべしと思ひ直しぬ。

又、或る夏富士登山を了へて、裾野の趣味を嘗むべく、二日ばかり瀧河原に滞りたる時なりき、夜の涼しさに乗じて、附近の山王山

に登り、頂上なる土の壇に立ちたり、こゝは野中至氏の別荘の後方也、薄く曇りて星疎らなる空の下に裾野の廣さを意識しつつ、極めて近き富士を、却つて遠く低く、黒き半圓形の塊物と見やる中、三合目あたりと覺しき所に、かすかに匂ふ燈火を見出だしたり、なほよく視れば、四合目、五合目、六合目と、段々上に行きて、有るが如く無きが如き明り三つばかり、地中より掘り出され掛りたる明玉の如くにはほのめく也、同時に予は、富士山の寶玉を滿たしたる自然の秘庫にあらざるかを訝かれり、斯くて後、闇に混じつゝも闇に紛れざる、其輪廓の圓みを持ちたる曲線を眼にて味ひつゝ、我れ始めて美の何物なるかを知ると遂に叫びぬ。

斯くて、風景上の價值乏しき富士を見たる予は、又、風景上の價值豊かなる富士を見たり、此に於て

予は、風景としての富士山の眞價值を知り得たりと云ふを憚らざるの勇氣を得ぬ。

其六 日本の文士畫家は未だ富士山を

觀望する方法に通ぜず

結局予は云ふ、富士を描ける繪畫及び富士を主題となせる詩歌文章の、古へより今に至る迄、殆んど凡て俗惡なるものゝみなるは

日本の文士畫家が未だ富士山を觀望する方法に通ぜざるが故なりと。

而も、一般多數の人が揆を一にして此弊に陥るは、幾何圖的なる富士山の形狀を其儘に見つゝ、而も之を以て、風景觀上の富士山の眞相となすと、なほ一つは、富士山の風景として尙ふべき所以と、風景以外に於ての重んずべき所以とを混同して、其間に區別を置かざるが故なりとなす。

されば、今後富士山を描寫し、富士山を詠歎せんとする者は幾回と無く此山に注意

文新を
富士に
發見す
るる家
のせし
用ん山

したる上、幾何圖的ならざる富士山を見出だし得るに至つて始めて筆を執るべく、而も、其筆を執るに當つてや、暫く、風景以外に於ての此山の價値を忘れ去らざるべからざる也、須らく

新に富士山を發見せんとするの用意

あるべし、富士を描ける繪畫及び富士を主題となせる詩歌文章の俗悪なるは、富士に注意することの疎漏なるが故也、忠實ならざるが故也、此點に於ては、流石鳥水子の富士に注意すること深き人なるを見る、彼れの富士を主題となせる文章、多くは凝り過ぎて却つて俗悪に陥るを免れざれど、中には「影富士を觀る記」の如き、眞に十分に富士の美の或部分を發揮し得たるもの無きにあらざる也。

◎湖沼觀の日本

其一 日本と湖沼觀

日本は、狹小なる島國の割合に湖沼に富めり、就中、平地に在りては周圍六十餘里の琵琶湖を始めとして、之に次ぐの霞ヶ浦、及び八郎湖、宍道湖、濱名湖、北海道の猿澗湖等を比較的大なるものとなし、又、猪苗代湖、中禪寺湖、十和田湖、諏訪湖、蘆ノ湖、富士八湖等、山地に在りて面積大ならずと雖も、風致を以て聞こゆるもの少なからざる也。

而して、舊火口に水の溜りて成りたるもの、山間の低地に水の集まりて成りたるもの、河水の一部膨脹して成りたるもの、舊河道に水の残りて成りたるもの、海灣の陸地に囚はれて成りたるもの、陷落せる地盤の水を貯へて成りたるもの等、湖沼の種類のすべてを

網羅し、其水質も、鹹きもの、淡きもの、清めるもの、濁れるもの、各種に分かる。

琵琶湖大なりと雖も、東西十里南北二十里周圍六十餘里に過ぎずして、未だ

吳楚東南圻、乾坤日夜浮

の洞庭湖の大觀を之に求むること能はずとなす、但し、大局面より之を見るときは、南の方壹岐及び對馬を以て朝鮮半島に連絡し、北の方、樺太及び北海道を以て西伯利亞に接続する所の日本海も、獨り其形式に於て湖沼の觀あるのみならず、元來

日本海に於て湖沼の觀あるのみならず、元來中間の地盤の陥落を以て日本を大陸と分離せしめし作用の結果が、即ち日本海なれば、事實に於ても、亦日本海を湖沼の部類となす

ことを得べく、更に範圍を擴めて、東塞加に連絡せる千島列島を外縁となす時は、オコーツク海も亦日本海と同一體の大湖にして、樺

太を以て湖中に横たはれる大島となすことを得べし、されど、是れ風景以上に超出せる着眼なるを以つて、範圍を或度に限り、湖沼觀を風景と一致せしむるに留むるも、東京灣、伊勢灣、三河灣、大村灣、有明灣等の其風景趣致、全然鹹水の湖沼にして、琵琶湖より或は大に或は小なりと雖も、其差甚だしからざるものあるを見る、更に

普通に瀬戸内と呼ばれる、多島の内海を包含して、一方淡路を以て四國と山陽とを結び、他の一方下ノ關と門司とを以て山陽九州を繋ぎ、なほ他の一方は、佐田岬と佐賀關とを以て四國九州を連ぬる水の範圍

は、之を海と呼ばんよりは寧ろ湖と云ふが當れるものにして、大さ琵琶湖に數十倍し、而も、大小無數の島嶼を有して、風景は湖沼の致を極め、其湖沼としての規模及び美觀は、實に世界に誇示するに足るもの

湖沼界の足るに戸内を以てはるるに世湖

也、寧ろ、湖沼としての風景に於て世界第一なるもの也。
日本小なりと雖も、此の如く、湖沼及び湖沼的趣致を呈せる海灣と内海とに富む、亦湖沼觀の日本を題目とせざるべからざる也。

其二 琵琶湖と其死活問題

獨立せる純然たる湖沼として、琵琶湖の大が日本第一に位せること、今更云ふ迄も無し、而も

所謂近江八景は、要するに俗的趣味の小景

に過ぎずして、斯る一隅に偏したる狭小なる局部を、更に細かに區別したる、半人工的小景を以て其價值を定められては、大なる琵琶湖は泣かざるを得ざるべし、所謂近江八景は、皆琵琶の柄の細き所、即ち湖の末の盛りたる所に固まれるもの也、此中獨り暮雪の比良山のみは、やゝ湖の廣き所の岸を占むと雖も、是亦狭き所より望むべきものとして八景に加へられたるものなれば、元來論するに足らざる也。

近江八景の
俗的趣味は
小景

る也。

尤も、大津が曾つて天智天皇時代の帝都たりし時には、湖岸より漸次に高き丘陵に依りて、畫の如き宮殿樓閣高低相望み、之に點綴するに櫻花の白さと松葉の綠なるとを以てして、其高雅優美の趣致は、却つて、湖の廣き部分に屬せる雄大の風景よりは、其狭き部分の、對岸の物象皆脈々として呼べば響へんとするが如くなると調和を保つものありしなるべく、其後、大津の帝都廢墟に歸し、多感なる平家の詩人思度をして

さい波や滋賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな

と感傷せしめたる時にも、古へ宮庭の名花たりしもの、今は空しく自ら開き自ら落ちて人の訪ふ無き山櫻となり、周圍の風物亦それに應じて、近江朝廷の滅亡を語るもの、如く

國破山河在、城春草木深

の趣致を呈し、以て、湖の狭き部分の景色と好配合をなしたるなら

ん、されど、今の天津は俗的市街のみ、而して、俗的八景と相俟ちて琵琶湖の末の盛りたる部分を益々俗化せしむる也。

眞に琵琶湖の大觀に接し、一望際涯無き湖面に媚容と羞態とを満たせる女性的趣致を領せんとせば、彦根の城址、比叡山、比良山等に登りて、眺矚を縱まゝにすべく、又太湖汽船會社の船に乗じて、大津長濱間を航行し、爾らすんば、大津より竹生島遊覽船に乗じて、湖面を縦斷しつゝ、北方に向ふを可となす、湖北の海津には、湖中に突出せる大崎あり、骨硬にして上に松を生じ、松間に古刹を挟み、而して、崎端近く竹生島の紫翠と相對し、比良、比叡の諸峰の、遠近濃淡層をなして背景を作るを見る、是れ

琵琶湖の風景の最も繪畫的な部分なるも風

琵琶湖の風景の最も繪畫的な部分にして、近江八景など云ふ俗的なるものとは選を殊に

せり、されど、いづれかと云へば、これも亦非常の絶景と云ふにあらず、寧ろ、晴和にして水蒸氣の多き日に、比叡の高所若しくは彦

根城頭より湖面を展望するを勝れりとなす也。

予は更に歩を進めて、琵琶湖を對象となしての實用問題と風景問題との衝突を論せんとす。

こゝに、琵琶湖を中間に置きて之を利用しつゝ、大坂灣と敦賀灣との間に運河を開き、以て日本の本州を縦斷し、下ノ關海峡或は津輕海峡を迂回せずして、太平洋と日本海との連絡を成すことを得ば、交通上至大の便益を生じ、商工業にも、軍事にも、日本をして一生面を開かしむるに至るべしと云ふ説あり、是れ、久しき以前より或方面に繰返されつゝありしにて、琵琶湖を京都に利用したる疏水運河の如き一局部の事業とは規模を異にし、日本の脊髓を横斷して形體を一變せしむると共に、其活動の敏活を助くる點に於て、世界の大勢にも影響を及ぼすべき大事業なれば、随つて、財力と人力とを費すこと非常に、今の日本の身上にては到底及びも附かざれど、今後百年或は二百年の間には、必ず現實せでは已まざるべし。

但し、専門的技術に属することは予之を知らず、亦、こゝに専門家の云ふ所に依りて數字を並べ立つる程、予は實地に委しき者にあらず、されど、一方は自然に湖と海とを繋ぎつゝある淀川の水道に工を施し、他の一方は鹽津より敦賀に至る直徑數里の間を掘削り、同時に、湖水及び湖底の状態にも或る變化を與ふることは、常識を以て之を考盪しても左迄の困難と思はれず、スエスの地峽に運河を開鑿したる工事などに比ぶれば、固より易々たる業なるのみ。

たゞ、吾人の問題とする所は、若し、琵琶湖を利用して、太平洋日本海連絡の運河が開鑿せらるゝに至らば、如何なる影響が風景に及ぶべきかと云ふに在り。

崑崙山系と樺太山系とが相迫る所、中間に海峽を存して、南北日本を分離せしめしを、富士火山帯、横より來りて之を填充し、南北日本の連絡を成すと共に、日本の腰に帶するに至りたることは、既に之を説けり、今此自然方の大作用の向ふを張りて

新●た●に●本●州●を●洞●切●り●に●す●る●こ●と●

人間の能力を示すべく、何と無く愉快ならざるにあらずと雖も、扱て、風景としては如何なるべき。

若し、實利一方よりする時は、運河開鑿の結果、琵琶湖は變じて一條の水の帯となり、周圍六十餘里の湖面は大抵濇腴の水田と化して、新たに日本に多量の米穀を寄與すべく、現今の魚蝦の利に勝ること萬々なりと雖も、斯くせられては風景が滅茶々々也、縦令俗的趣致にても、近江八景なるもの、亦一般多數の人をして自然に親ましむる誘導をなすの功あり、之をして空しく田勝の間に埋没せしむべからざる也、若しそれ、竹生島に至つては、之を稻の波に圍まるゝ土石の大塊となすべく餘りに惜むべし、比叡も比良も、湖水に影響を倒まにすべき餘裕無くなりては、風致殆んど零に歸すべけん。

されど是れ、纏て

富士山の頂上迄汽車或は電車を通じて、燦爛たる電燈に山の夜

を照し、其五六合乃至七八合目に大旅館の建設せらるゝに至るべきと共に、琵琶湖の變形も亦免るべからざる運命にして、勝景の地を損することを厭ひ、鐵道の布設に反對の建白をなし、詩人ウオーズオース日本に再生すとも、亦如何ともすること能はざるべき也。

故に、吾人は無益の事に心思を勞することをやめて、更に襟度を大にし眼界を廣くし、風流とはきたなくしみつたれなるそれにあらず、佳景とは半潰れの茅屋とグラ／＼する橋とに限るものにあらずして、其日の空氣と水蒸氣との或る作用に依りては、工場も、煙突も、煙突の煙も、鐵道も、汽車も、電線も、電柱も、石造及び煉瓦造の洋式なる建築物も、ペンキ塗、トマン製の和洋折衷家屋も、電燈、瓦斯燈の光も、皆美的なる觀を呈し、而も、是等の物と自然界との調和の間より、舊日本的ならざる一種の新なる趣致を生ずることを思ひ

自然も輕少なる負傷の爲めには、俗悪化せらるゝ場合多けれど、其負傷重大なるに至れば、却つて之が爲めに壯美なる光景を呈する

ものなるを知り、自然に纖巧なる小刀細工を施すには反對するも、之に思ひ切つたる大損傷を興へ、大局面に渡つて全然面目を一變せしむるの、雄大偉烈なる人爲には、寧ろ贊助を與ふるを可となす、されば

富士山の如きも、頂上迄電話を通じ、登山期には特に頂上に近き所に郵便局の設けらるゝが如き、今日の輕少なる負傷にては、中途ハンパにて厭ふべきも、進んで、雄大堅牢なる大建築物の旅館は設けられ、汽車或は電車を通せらるゝ等の極端なる損傷に至らば、却つて之が爲めに新なる趣致を生じ

來るべく、琵琶湖として、目に見えぬ程にはあれど、止水を衰へしむる四大作用、即ち、自然の涸渴、水草の腐敗せるもの、堆積、流水

と共に注入する泥土砂石の填充、それ自身の水の自然的及び人工的排出等の爲め、年々少許づゝ容積を減じ来る傾きもあり、寧ろ此傾向に猛烈なる人爲的助力を與へて大革命を起し、停滯せる溜り水を變じて、本州を兩斷しつゝ、太平洋と日本海とを連絡する所の、活ける水路となし

半ば、湖沼としての趣を存せしむるが如き生温き手段に出でず、全然實用の權威の下に風景を征服し、大船巨舶をして障碍無く太平洋、日本海間を往復せしむるに至らば

全然舊風景を征服することに依りて、更に新風景の見るべきものを生じ、雄大偉烈なる人力の結果と自然との間に、一種の好配合が見出ださるべき也、故に、予は、琵琶湖若し破壊せらるべき運命ならば、多少湖沼としての趣を存せしむるが如き中途ハンパなる細工をなさず、痛快に之を料理して、寸毫も舊時の面目を保たしめざらんことを希望す、是れ

半殺し程も
殺したるし
風下に
無敵景さ

殺して而して後に活かす

ものにして、半殺しに勝ること、萬々也、すべて、半殺しは不可なりと雖も、就中、風景の半殺し程不可なるは無し、天下亦半殺しにされたる風景程目も當てられぬは無き也。

且つそれ、琵琶湖全然破壊せらるれば、日本は最も大なる湖沼を失ふべしと雖も、琵琶湖に数十倍せる大規模にして、而も全然湖沼的風景を呈するのみならず、風景としての價値に於ても亦琵琶湖に数十倍せる瀬戸内の、決して人力の下に破壊せらるべからざるあれば

琵琶湖を失ふも亦惜むに足らず

となす也、たゞ、豫め殿に戒め置くべきは、琵琶湖は斷じて小なる實用の爲めに少しづゝ破壊すべきものにあらざること也、本州を横斷して太平洋と日本海とを連絡せしむと云ふが如き、雄大偉烈なる事業の爲めの外には、琵琶湖は決して犠牲に供すべきものにあらざ

琵琶湖は
湖沼に
實用は
少く
破るに
惜む
べき
なり

る也

其三 日本湖沼中特殊の趣致を有せるもの

山地の湖、平地の湖、海に近き湖、河に近き湖、海にも河にも遠き湖、各特殊の趣致を有して、之に一樣の觀を下すべからずと雖も、おしなべて云へば

日本湖沼は、風景に於て其海灣及び内海に如かず

となす、大なる湖沼と大なる海灣及び内海とを比較し、小なる湖沼と小なる海灣とを對照するに、何れも、海灣を以て遙に湖沼に優れりとなす、尤も、淡水と鹹水との色相の差、海岸と湖畔とに於ける土石草木の形質の違等、これ無きにあらずと雖も、大觀すれば、日本海灣及び内海は大抵湖沼の趣致を呈しつゝあるを以て、之を湖沼と對比して風景の價値を論ずるも、亦不倫となさざるべし、而も、

日本湖沼の趣致に於ては、内海及び海灣の風景に如かず

日本の海灣は何れの部分に於けるものにも皆一樣に好しと云ふにあらず、否、すべて皆好からざるにあらずと雖も、亦其間に差等あるを見る、就中最も

湖沼の趣致を呈して

其空氣の色迄も全然湖沼的

なるは、東海道に於ける諸海灣及び瀬戸内を推す也。

されど、純然たる湖沼は又それとしての特殊の趣致無きにあらず、海灣及び内海とそれとを比較して優劣を論ずるは、湖沼に對する或る變則の着眼にして、單に湖沼のみを問題となし、其範圍内に於て比較觀をなすも、先づ、蘆ノ湖、富士の精進湖及び河口湖、中禪寺湖、猪苗代湖、諏訪湖、十和田湖等山地に在るもの、或は森殿にして人を引締むるが如くなる、或は幽深にして人を引入れんとするが如くなると、琵琶湖、霞ヶ浦、八郎湖、宍道湖、濱名湖、猿澗湖等平地に在るもの、或は淡遠にして人を招ぐが如くなる、或は慘

呈珠著の日本
すのる中本
る趣し唯の
も致き一湖
のを特つ沼

澹として人に訴ふるが如くなるとは、何れを何れと云ひ難きそれ
れの見所ある也、就中予は

山地のそれと云はず、平地のそれと云はず、日本の湖沼を總括
したる中に、唯一つ著るしき特殊の趣致を呈するものを、羽後
の八郎湖

となす、但しこれは、風景に於て著るしく他に優れりと云ふにあら
ず、風景としては、寧ろ日本の湖沼の上位に在るを得ざるものなり
と雖も、平地の湖沼に於ける或る共通の趣致の、此湖に於ては特に
著るしく強度なるを以て、他に異なれりとなす也、乞ふ之を擧げん。
すべて湖沼は女性的也、山地のその陰森として凄氣人を襲ふ、
是れ所謂毒婦妖婦の部にあらずや、而して、平地の低き所に横はれ
るそのの、艶美にして且つ満面悲哀を含み

玉容寂寞淚闌干

の風情あるもの、是れ、觀樂を失へる楊妃にあらずは、即ち行春を

かり云雲
なほふ煙
る霧へ霧
氣くき霧
柔よと

恨むクレオパトラなるべし、されど、予は日本に於ける多くの湖沼
を見來りて、其壯觀なるもの、其佳景なるものは、之に求めずして
他に求むべきを知ると雖も、未だ、東西三里南北七里周圍約二十里
の略ぼ楕圓をなせる湖面に満てるもの盡く悲哀にして、斷えず湖底
より湧沸するもの皆憂愁なること、八郎湖の如く極度なるものある
を知らざる也、而も是れ、對岸の雄鹿半島の山の形と色とが得も云は
れず淋しく哀れなると、極めて海に近くして、北部日本海に特有な
る黯慘たる不斷の煙霧、及び濃厚なる湖上の水霧の合併作用の下に
鬱煙瘴霧と云ふべき程粗豪なるにあらずして、それよりは弱く
柔らかに、優しき情を含む一種の氣

を醸し成すに依れりとなす、此湖に就いての神話は、「八郎」の名と
共に男性的なるものなりと雖も、寧ろ、絶世の美人が戀を失うて湖
水に身を投げしより、此の如く憂愁悲哀の趣致は成されたるものに
あらずや、西洋に此の如き極度の趣致の湖沼ありや否や、我輩寡聞

にして未だ之を知らず、支那の莫愁湖と雖もかほどにはあらしと思はる、勿論、日本に於ては、かゝる趣致に於て此湖に似たるものさへ無き也。

此湖の趣致は、湖上に舟を泛べて傾し得らるゝにあらず、湖畔の路を行きつゝ之を望み、或は涼車の窓より瞥見し、或は三倉鼻と云ふ普通に湖を望むに適せる地と稱せらるゝ所より眺むるが如きにては、たゞ此湖の平凡なるを見得るのみ、特殊なる此湖の趣致は、雄鹿半島の寒風山、或は、奥羽線大久保驛より半里ばかりなる虻川村東傳寺の後の山に登るにあらずんば、極むること能はざる也。

而も、此湖の實用的方面を見るに、魚蝦の利、運輸の便、亦備はらざるにあらずと雖も、羽北の地なほ人煙稀薄に生業不振なるを以て、湖上に舟を見ること少なく、湖畔に家を見ること稀に
琵琶湖、霞ヶ浦等に見るが如き水郷の趣を帯ばず
と雖も、之が爲めに、却つて其憂愁悲哀の致は成さるゝ也。

其四 日本の瑞西と日本のベニス

瑞西の如き湖國の趣は、之を日光中禪寺湖に見るべく、ベニスに似たる水郷の極致に至つては、未だ日本に求むること能はずと雖も、なほ、霞ヶ浦を帯べる潮來、中ノ海及び突道湖を控へたる安來等に之を窺ふことを得べしとなす。

相當の高所に在りて、相當の面積を有し、高山深林に圍まれつゝ、風景殊に秀で、而も、宿泊遊航の便を備ふるに於て

中禪寺湖は日本第一の山湖

と呼ぶるゝを得べし、其大きさに於ては、同じく山湖にして隣國に在る猪苗代湖の東西三里十一町南北二里五町周圍十三里十九町なるに劣ると雖も、なほ、東西三里南北一里周圍七里三十二町を數へ、猪苗代湖より更に高さ位置を占めて、人間の生活と普通の交渉無き、

秀麗森嚴なる純自然界を占めつゝある、何れか之と山湖の首長たる地位を争はんや。

有名なる華嚴ノ瀑の上より行くこと一二町にして、其、天妃が姿を映すべく秘め置ける明鏡の光に打たるゝを得べく、海拔八千百餘尺の男體山、湖を壓して、殆んど常に雪あり、中宮祠恰も其林叢と共に湖より吐かれたるが如し、而して、湖畔二三の日本旅館の外、外人の爲めに設けられたるレーキサイドホテルあり、朝暉夕陰、彷彿として

面中の瑞西を想はしむ

未だ踏まざる畫中の瑞西を想はしむる也。

而して、土浦より小流船に乗じて霞ヶ浦を縦斷し、湖水兩邊の眞菰に挾められて川の如くなれる間に、十二の橋と共に、水鶴に包まれたる潮來の低き町を見出だし、絃歌笑語すべて彩霧の中より出づるに接しつゝ、

潮來出島の眞菰の中に菖蒲咲くとはしほらしや

と樓上の人唄へば、舟中の人之に和して舷を敲するの趣致を味ひ、又、庄原より小流船にて宍道湖を斷ち、松江の大橋の下を過ぎて中の海に出で、全然湖沼に齊しき此海灣の風景を領し、終に安來の岸に至りて、水と地と相追ひ、舟と家と相雜はるの間に

安來千軒名に出たところ社日櫻に十神山

の俗語の節面白きを聞くに至れば
恍として、日本のベニスは是れなり

とは本恍
想是のし
ふれべし
なニて、
リス日

と想はざるを得ざる也。

水郷の風物、水郷の色彩、水郷の趣致、共にこゝに見出だして、研究すべく、描寫すべく、玩味すべく、詠歎すべし。

以上は敢て、日本に於ける最も優秀の風景なりと云ふにあらず、唯だ、湖沼としての日本を點檢せば、たまく此の如き風景趣致をも見出だすことを得べしと云ふのみ。

其五 瀬戸内海觀(イ)

瀬戸内は、其風景に於て、全然湖沼的にして、而も、其規模の大なること琵琶湖に数十倍し、獨り、日本に於ての大觀美景なるのみならず、亦世界無比の大觀美景なる也。

日本にて見るべきものは

富士山と瀬戸内

と也、これを讚美して

日本に過ぎたるものは二つあり富士の高根に瀬戸の内海

となすことを得べし、其他、何山と云ひ、何湖と云ひ、何溪と云ひ、

何野と云ふものは、必ずしも保證せずと雖も

此二つのみは、世界の人の向つて自慢をなしても、確に耻を擡

かぬ

もの也。

日本にて見るべき物の二つ

日本は海國たる位置に於て海を尙ばざるべからざるのみならず

日本は海國也、

日本は海國たる位置に於て海を尙ばざるべからざるのみならず

也、固より、一望際涯無きの海洋は、風景を形造るべく餘りに空漠

たりと雖も、海灣及び内海にして湖沼的趣致を呈するもの、中より、

極美なる風景は見出ださるゝ也、山岳も亦、日本に於ては海灣及び

内海との配合の上に於て美を成すにて

日本に於て、海灣及び内海を度外視したる、山岳及び溪谷の美

のみを説くは、日本の風景を知れる者にあらず

となす、故に予は、大山、箱根、天城を連絡して海水を抱ける半圓

形の上に富士を突起せしめて、同じく半圓形を畫ける房州の尖端と

相對しつゝ、遙に噴煙の大島を中間に置きて、巨大なる湖沼の趣を

成せる、相摸灣の美觀偉觀と、此瀬戸内の大局面の風景とを以て

日本の双美

日本の双美

山岳及び溪谷の美を度外視したる、日本に於ては海灣及び内海との配合の上に於て美を成すにて

日本は海國たる位置に於て海を尙ばざるべからざるのみならず

となす也、若し夫れ、瀬戸内に富士山を加へて、至る所の島嶼の間に、姿を現はし影を倒まにせしめば、日本の風景全く之に限りて、更に他を擧ぐるを要せずと雖も、こは
 梅の薫りを櫻に持たせて枝垂れ柳に咲かしたしとの慾望に異ならずして

富士山を加へずと雖も、瀬戸内は日本の誇りたるを失はざる也。

瀬戸内の風景の特色は、既に述べし如く、一方淡路島を以て、四國山陽を繋ぎ、他の一方下ノ關と門司とを以て山陽九州を連れ、更に他の一方佐賀關と佐田岬とを以て四國九州を結びたる間の、周圍數百里を有せる内海にして、山陽四國の兩岸、或は迫りて岬をなし、或は離れて灣をなせる間に、大は一郡をなせる讃岐の小豆島、周防の大島等を始めとして、小は無名の一塊岩に至る迄、或は集合し、或は散開して、無數の島嶼を水上に現はし、大抵の島には船着場ありて、人家相望み、部落をなし、村邑をなし、最も大なるは市街を

も水蒸
盛の戸
也蒸内
發は
最海

の湖沼
極的
致風景

景純
日本
的風

なせる所さへあり、之に應じて、水上亦無數の通船と漁舟とを點綴し、而して

氣候温暖なる上、駿潮流通して海水の蒸發最も盛に、常に櫻糊たる紫色の水蒸氣を籠め

明麗にして潤澤、温雅にして和暢なる

湖沼的風景の極致

を成すに在る也、而も、其最も採るべきは、惣體の自然が特に是れ風景なるぞと云うて人の注意を引かんとするの態無く、其間に住み及び動く所の人間亦風景を補はんとするにもあらずして、偏へに各自の生業に勵みつゝあるに、求めざる調和配合自ら成りて、氣障ならず脈や味ならざる風景をなしつつ、

尤も水蒸氣に美化せらるゝに適し

紫なせる水霧の中に遠近幾十百段の濃淡を示して、靜なる物に動く物を加へたる風景趣致を烹煉し

數百里の周圍を有して、淡中深趣を含める純日本的大畫圖を
作成せるに在りとなすべし。

實に、瀬戸内は、之を内海と云はんよりは

大なる鹹水の湖沼

と呼ぶの當れるに如かざる也、固より瀬戸内は、地盤の陥落及び海
水の破壊に作用せられて成りたるものなるのみならず

下ノ關海峽は古代の堀割

なりとの説もあれば、其性質に於ても亦湖沼に近きものと云ふべし。
斯くて瀬戸内の風景は、一時を利用して一局部より之を窺ひ見る
も好く、亦、數日或は十數日、乃至數十日を費して、總體を周覽す
るも宜し、山陽海岸至る所の高所より、四國の山を背景となして望
むも可なれば、四國海岸至る所の高所より、山陽の山を背景となし
て眺むるも妙也、而して、小汽船或は和船を僦ひ、爾らざれば便船
に依りて内海を廻遊し、島嶼及び海岸に於ける特に有名なる勝地は

大なる鹹水
の湖沼

瀬戸内は比
平に凡に松
戸内は比
瀬戸内は比

瀬戸内見
る中より

皆之を訪ひ、或は舟中よりし、或は岸頭及び島上の高地よりして、
細視大觀共に兼ねるを最も優れりとなす、之に比すれば
琵琶湖は餘りに平凡に、松島は餘りに纖巧
也、寧ろ、瀬戸内は琵琶湖の風景をも松島の趣致をも其一小部分に
包含して、なほ大部分の本領を贏す所に價値を有する也。

其六 瀬戸内海觀(口)

既に瀬戸内の大略を説きたり、此に於て、予が經驗に屬せる
船中より見たる瀬戸内と、山陽海岸より見たる瀬戸内との二
を叙して、瀬戸内海觀の兩面を示さんとす。

先づ、船中より見たる瀬戸内より着手せん、但し、これは大局面
に渡れるものなれば、多く場を塞げらるゝことを避くべく、其描寫
にあらずして、概念を傳ふるにとゞむべし。

明石海峽以西を瀬戸内の範圍となす、即ち

はのくくと明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ

てふ明石の浦の眺望は、瀬戸内の風景の始まりにして、船の隠れ行く島は即ち淡路也、こゝにて劈頭注意を拂ふべきは

瀬戸内に水蒸氣の多量にして、これが海陸の自然と調和しつゝ、淡中深趣ある純日本の風景を成す事實は、既に古への歌聖に道破せられ

し事也、「はのく」と明石の浦の朝霧」と云ふ中に、温雅和暢なる自然が水蒸氣に作用せられて、明麗潤澤なる畫面に一枚の薄絹を掩ひたる、瀬戸内海的、即ち純日本の風景は活現するにあらずや、而も、島隠れ行く迄船の見えしに依つて、其朝霧の咫尺も判かす濛々たるものにあらず、確に薄絹の如く淡きものたるを知る也。

斯くて、昔乍らの明石の浦の趣致に酔ひつゝ、船を播磨灘に進むるに、瀬戸内も未だ島多きあたりに至らずして、たゞ、高砂、尾上、曾根等の、松に名を得たる播州海岸を右舷に眺むるのみ、既にして、

飾磨、網干、室津などの港灣を看過すれば、左方に始めて大小島嶼の淡靄を排しつゝ、簇出するを見る、其數三十有餘

近きものは緑にして黒からんとし、遠きものは紫にして青からんとす

之を家島群島となす、家島其首腦にして周圍四里九町、上に六百三十餘の漁家と家島神社とを有し、南面に灣を控へて小港をなす、其他、西島周圍五里十八町、坊城島二里二十一町、男鹿嶋二里二十町等を重なるものとなし、而も、家島の外には家あるもの無し、之を瀬戸内の風景の關門となして、將に嶋と水と地を争ふの間に入らんとす、但し、是等の嶋にても、瀬戸内に在りては大嶋の部にあらず、僅に中位を失はざるを得るのみ、これより後、一々嶋の大小に就いての數字を掲げず。

家嶋群嶋の側面を撫でつゝ、過ぎ盡くせば、須叟にして、風骨非凡なる一巨嶋の、家嶋群嶋三十有餘を歴する大規模を以て西南に屹立

するを見る、是れ、瀬戸内第一の小豆嶋にして
此嶋と殿嶋とは、瀬戸内に於ける群嶋中の双絶なれば、後にて
之が比較評をなすべく

今は先づ船中より眺めやりたるのみに止めん。

西に進みて、西南に望みし小豆嶋を東南に見送るに至れば、近く
備前の牛窓港を右にして、大嶋、前嶋、黄嶋、黒嶋、大嶋、沖鼓嶋、
沖竹子島等並羅列をなし、更に、兒島半島海中に突出して近く讃
岐の一角と相對する、備讃海峡に入り、豊島、直島、石島等の彼方
に、なほ小豆島の我を送つて打霞みながらにイゆるを顧み、南方五
劍山の突兀たるを標的として、那須與市が扇を射、景清と美保谷と
が鍔曳をなし、絶好なる詩的歴史の聯想せらるゝ、源平屋島の古
戰場を其西に指し、崇徳天皇左遷の地にして且つ其御陵の所なる白
峰を更に其西に望み、鎧島、大島、男木島、女木島等の適宜なる形
状と位置とを以て點綴するを眺め、濱の波の白き、山の松の青き、

風景の妙に於て
歎る妙に於て
のるくふ
なを迄も

人家より立つ煙、漁舟に動く人、一々指點するに堪へたるを味ひ、
而も、ほのくと明石の浦を立籠めし朝霧と同質の淡靄の、藤鼠な
せる薄絹を遠近幾重にも張り渡したるが如くなるあるを見れば
風景てふものは、斯く迄美妙なるを得るものなる歎
と、感歎せざるを得ざるに至る也。

而も、備讃兩國相迫りたる間を過ぎて、右に兒島半島の下津井港、
韓琴の泊の古跡などを望み、左に讃岐の九龜を掛けて、金刀比羅神
社の象頭山を指すべき所に至れば、局面開展して風景亦一變し、豎
場島、釜島、小與島、與島、櫃石島、六口島、鹽飽島、牛島、廣島、
波節岩の諸島簇出するの外、讃岐西端の岬角三崎の長く海中に斗出
するあり、恰も此岬角を起點とする如くにて、志々島、粟島、高見
島、下二面島、佐柳島、手島、眞鍋島、大島、北木島、白石島、大
高島、神島等の一聯は備中笠岡に向ひ、六島、土生島、小飛島、大
飛島、宇治島、袴島、走島等の一聯は備後鞆ノ津に向つて走る也、

鞆の津の附近には、仙醉島、辨天島等の畫も亦如かざるあり、これより、南方は讃岐の三崎と伊豫の大隅崎とを兩端となせる大海灣を控へて島嶼少なく、たゞ、北方備後の岸に、鞆ノ津の附近阿伏兔岬の勝景と相連なりて、田島、横島、百島、向島等の諸島の西方に在るあり、暫くは人の眼を養ふの大觀を成す、所謂燈灘是れ也。

されど是れ、瀬戸内に於て最も島嶼の複雑せる部分に入るべく、暴風雨起らんとする前、天候一時靜穩に歸すると、事情を齎しくする也、これより進むこと暫くすれば、一方、安藝の忠海及び竹原兩港と、他の一方、伊豫の大隅崎と相對せる間、

進む路無
重なる島嶼
如くは

即ち安藝海峽にて、大小の島嶼重複すること限り無く
海水こゝに盡きて進むに路無きにあらずやと疑ふ、來る舟は陸地より吐かるゝ如く、行く舟は陸地に吞まるゝに似たり、而も、此間は潮汐の出入も亦多岐にして、水路の屈曲促迫殊に甚だしく、船舶の大なるものを航行せしむる能はずして、それ等

は、大島と今治との間なる伊豫の岸を迂回する也、今其島嶼と水路との複雑の狀態を略叙せんに、岩子島、大細島、因ノ島等は備後に屬し、佐木島、高根島、生口島等は安藝に、弓削島、生名島、佐島、岩城島、赤穂根島、伯方島、大三島、大島等は伊豫に屬せるが、中には巨島少なからずして、殊に、大三島の如きは、明石以西安藝海峽に至るの間に於て、小豆島に次ぐの面積を有せり、又、大三島の西には、大下瀬戸を隔て、大崎上島、大崎下島あり、大崎上島と安藝の岸との間には柳ノ瀬戸横たはり、更に、伯方島の東なる鏝島、大島の西なる津島、大三島と生口島との間なる瓢箪島、大三島の北なる大久野島、大三島と大崎上島との間なる横島、肥島、大下島、大崎上島の北なる生野島、阿波島、伊久賀島、大芝島、馬島、里島、大崎下島の北なる三角島、其西なる豊島、屋久比島等の小島ありて、巨島との配合をなし、更に西して、上浦荻島及び下浦荻島の、多數の小島を帯びつゝ、相連なるあり、下浦荻島と安藝の岸との間に猫瀬

世界に於ける特殊な風景

戸の潮流を通ず、是等の外、藝豫海峡に存在する瀬戸を總計すれば、布刈瀬戸、三原瀬戸、伯方瀬戸、花栗瀬戸、刈瀬戸、來島瀬戸、大下瀬戸、猫瀬戸の八に上る也、實に是れ

世界に於ける、島嶼と水路と潮流とが、紛糾錯綜して迷宮の如き観をなしつゝ、寸分の地を争ふの、標本的一區域にして、随つて其風景亦瀬戸内に於けるの異色

たり、殊に、大崎下島には、戸數四百二十の御手洗町を距ること十町にして、大長村に屬せる高原に、數百樹の桃林あり、花時島上に紅霞を簇らして、海より蒸さるゝ紫霞に混する光景は、人間界を離れたる仙島の如き趣を成し、一たび至り看る者をして、恍として去る能はざるの情あらしむと云ふ、又、此邊の區域は、往年支那及び朝鮮を震撼せしめし、我が勇敢なる海賊軍の根據地也。

藝豫海峡を過ぎて、眼界再び開き、油を湛えたる湖沼の如き景色に自ら眉を暢べしが、幾ばくも無くして、前面に、周圍二十五里二

十五町ある巨大なる倉橋島の起るあり、水路は、島と吳半島との間に清盛が開鑿せし音戸の瀬戸を過ぎて、人をして

船頭可哀や音戸の瀬戸で一丈五尺の櫓がしわる

の俗謠を憶はしめ、江田島を左に、吳軍港を右にしつゝ、廣島灣に入り、宇品を横に見て嚴島に向ふ、嚴島即ち宮島に就いては、小豆島と比較評をなして、之が爲めに別に回を設くべく

更に進んで、大小數多の島嶼を其背後に望みつゝ、大黒神島、阿多田島等の傍を過ぎ、南方、伊豫の三津濱に迫りて、伊豫の小富士と稱せらるゝ興居島の峙つを、遙に左舷に望み、なほ、興居島より連綿として、野忽那島、陸月島、來中島、怒和島、二神島、津和知島、扱ては、瓢箪を倒したるが如く横に長き屋代島迄、横に一線を描きつゝ、廣島灣を封鎖し、之に湖沼の趣致を與ふるを見る、而も、突破して封鎖を出づれば、室津半島の極端に位せる室津港と上ノ關海

峽を隔て、長島の横たはるあり、長島を中心として、東には屋島、平群島あり、西には祝島、小祝島を見る、されど、これより西は渺茫たる周防灘にして、東の方伊豫灘と連なり、や、湖沼の致を失うて海洋の靚を成し、周防の岸に近うして、笠戸島、大島、仙島、黒神島、馬島、沖島、野島等のあるあり、又、豊後の姫島の一方に峙つを見ると雖も、海面の廣き割としては數にもならず、是迄看來りし瀬戸内の特色は早や認むべからざる也、但し、風景としては、これも亦目先が變りて面白し、模糊として水に粘せる姫島の外に、文珠山の一峰あたりを拂つて秀づるを望み、更に、九州中國兩岸の青を有無彷彿の間に指しつゝ進めば、海水再び蘘の口を括るが如くに迫りて、兩邊の青山紫峰争うて我に揖し來る、斯くて其窮極する所は、銷魂の歴史を留むる壇ノ浦の古戰場と、百貨輻湊の馬關及び門司とを一にして、舊感慨新趣味共に備はれる日本の關門をなす也、此に至れば、彦島の海峡に横たはりて玄界灘の風濤を防ぐ有と雖も

瀬戸内の風
景の特色

空氣の色や、瀬戸内に異にして、はのくくと明石ノ浦を立籠めし朝霧と同質の淡霧は、著るしく風景に作用せざる也、更に、下ノ關海峡を通過して玄界灘に出で、水の色、空の色、風の色、靄の色、盡く異なるを見るに至つて、顧みて、眼底腦裡に残れる瀬戸界の風景を想ひ來らば
 始めて明らかに其特色を知る
 ことを得べけん。

其七 瀬戸内海觀(八)

一體に瀬戸内の風景は、船に居て之を眺むるよりは
 至る所、島嶼及び海岸の高所に上りて之を望むを、優れりとなす也、近く眺むるにも遠く望むにも、或る程度以上の高所よりせざるべからざるは、舟にて下るべき急流の外、すべての地の風景皆

瀬戸内
の風景
望す所は
岸内より
望むべし

爾りと雖も、殊に瀬戸内に於ては、巨島重複して、たゞ一様の連山が水を繞つて屏風をなすが如き觀を呈する部分多ければ、水上を漕ぎ行く船よりにては、己れの位置最も低き故、十分に其風景としての蘊蓄を窺ふこと能はずとなす、故に、瀬戸内の風景は、先づ船にて觀たる上、更に高所の地點より望まざるを得ず、而も、島嶼に於けるそれよりは

岸頭の高所より展望するを最も優れり

となす也。

されば、嘗つて、山陽道海岸にての登臨の勝に富めるを以て名ある各高所を選び、之に依つて瀬戸内の風景を批評すべく試みし、予の經驗をこゝに語り來るも、必ずしも無用の業にあらざるべし、た

瀬戸内の風景は春を最も好しとするに

予の之を試みしは十二月の寒天なれば、或は其極致を窮むること能

はざりしやも知れざる也。

されど、冬晴、春よりも長閑にして、温波煙靄を蒸し、瀬戸内の海は、予の爲めに出來得る限りの姿態を呈したるに似たり、兎に角其概要を叙せん。

先づ、瀬戸内の一方の門戸たる明石の人丸山より見渡したる風景趣致より始めんに、淡路島は、須磨の波打際より望みしとも、舞子の松の間より眺めしとも異なりて、之に對すれば、不思議にも己れ自身の旅人たるを強く意識し來り、今迄起らざりし旅心、俄にしみみと身にしみて來る也、陸と海と、海と島との配置が、妙に客途の光景を成しつゝ、あるに由つて爾る歟、島の形及び其色と、水の色及び水に浮く船の趣との、相掩映する風景が、美しき中に云ひ難き哀れを含んで、人を惱殺するに由つて爾る歟、時は朝にあらねど朝の趣をも夕の趣をも共に呈する淡靄は今もあり、島がくれば行く船も亦あり

己れ自ら
旅する身
の風景を
意識する

暫く眺めつゝある間に、旅の哀れ、旅の樂み、旅の古き趣味、旅の新なる趣味、一時に混淆して渾身に湧沸し來り、泣かんことを欲すると共に亦笑はんことを欲す、而も斯く迄人を惱ます所の要素は何ぞと問へば、要するに空氣の色にてある也。

次には、赤穂の御崎なる伊和津比賣神社の境内より展望したり、時は夕暮なりき、石段を登りて、松林の間より崎の極端に出づ、す

て
松林の間を通過しての、人無き所に開展せられたる風景は、松の爲めに淨化せられたる靈界の如き感じを興ふるものにして、而も極めて日本的

なるもの也、泥んや、其風景の元來他より秀でたるものあるをや、晴れたる日の夕暮には、何れの所の風景も好からずと云ふこと無く、殊に、海岸のそれは一入美を加ふるもの也、而も、日本の名勝に數へらるゝ此地にして、稀なる快晴の日の夕暮に逢ひたる也、海は、

松の淨化の靈界に

瀬戸内の彩色

一日休せずして十分に吸ひ込みし光を、少しづゝ吐き出だしつゝあるかと思はるゝばかりに、薄白き靜默の中に脈搏と呼吸とを認むべきが如く、東南三里の沖に散布せる家島群島の蒼茫として隱約たる風情得も云はれず、粗忽に見れば有るが如く、丁寧に見れば却つて無さが如くなる小豆島には、魂もそれに吸ひ寄せらるゝ也、加之、商船漁舟取混せて、近きは灰色、やゝ遠きは紫色、更に遠きは朱鷺色、最も遠きはたゞ夢の如き色と云ふより外に形容の辭無き點景の微妙、乃至、水と天との中間や、水に近き所に、赤の勝ちたる紫に黒みを加へたる淡靄の棚引ける、全く風景に酔はされて、腰の痺るゝを覺ゆるばかり也、早や夜の色を催し來れる阪越港内の動靜、室津の灣の水煙の中に黄暈を描き初むる燈火、西の方雲か山かの上に明滅たる霄の明星、風景として、敢て必ずしも明石の人丸山に優れりと云ふにあらずと雖も、確に
より多く瀬戸内の彩色の加はれる

を憂ゆる也。

海の異なる時

兒島半島の瑜珈山に登りたるは、人丸山及び御崎の眺望を試みしより、二日後也、瀬戸内の海はこゝに促りて、半島の下津井港より讃岐の九龜迄海路僅に三里二十八町なる備讃海峡を、やゝ海岸より退きて、登路半里の高所より眺望するなれば、其風景全く人丸山及び御崎と異なれり、風程に靄重く、晝乍ら冬の弱き日さしは海の色淡くして質の濃き汁となし。

大小數多の島嶼も、亦白帆と同じく水上に泛ぶ輕き物の如く、象頭山及び讃岐の小富士を抽出せる對岸の四國も、たとへば、淡青色に少しく紫を加味したる泡の塊りの浮き出でたるに似たる也

鞆の津の後の丘なる沼名前神社の境内より海に對したるは、更に其翌日也、近く仙醉島の、島嶼に於ける蒼潤と明麗との致を極めて岸を離るゝこと僅に三町の所に横たはるあり、辨天、玉津、皇后等の諸島之に連なり、辨天島は青松に固まるゝ天女の廟を聳ぐ、是等

瀬戸内の島

を前景となして、豫讃の衆峯背景を作れる間に、群島の或は起り或は伏すあり、而も、此日は天陰りて寒氣嚴しく、空氣は暗澹たる中に煙霏を含みて、やゝ濃き鼠色に畫面を塗り潰したる如く、海も空も一樣に憂愁に沈むが如き姿を示し、鶉か何か、黒く大なる鳥一羽、仙醉島のはとりに低く、輪を描きつゝある、如何にも冬の海の趣を現はしたる淋しき活動にして、たゞこれにのみ眼を引かれしが、既にして、鳥の鳥陰に隠れて見えすなるや、恰も其跡を埋むるが如く、幾重に重なりて濃淡の色を異にせる船と島と山とは、暗澹たる鼠色の煙霏を押分けつゝ、眼に近づき來る也、之に對して予は流石は、曇天にても瀬戸内の曇天は異なるものと思へり。

なほ、鞆の津及び其附近に於て、福禪寺の對潮樓、阿伏兔岬の觀音堂等にも登りて見たり、共に絶景にして、各特色ありと雖も、大體は沼名崎神社と相似たり、而も、此日の暗慘たる鼠色は、殊に其

等の風景を相似せしむるに力ありき。

以上の外、なほ登臨すべき所少なきにあらすと雖も、予の経験せしは以上に止まれり、以上の總計より得來れる、予が或る概念を述べんに、瀬戸内の風景は、海面溫柔にして島嶼多く、島嶼の外には對岸の陸地の微かに望まるゝに在り、交通頻繁に、漁撈の業盛にて、他の海より舟の數、帆の數、櫓の數多きに在り、海濱に人家多く、島嶼の中にも亦人家を有するもの少なからずして、部落をなし、町村をなし、市邑をなし、東西南北到る所、屋宇煙火の相望むに在り、海濱と島嶼との別無く、人家のある所大抵樹木のある所にして、而も其多くは松に、至る所、叢をなし林をなすに在り、暖潮海に通じ加之氣候温暖なるを以て、海水の蒸發盛に、紫を含める霞霧多きに在り、是等のすべてを調和せしめ配合せしめて、之を船より眺め、岸より望み、島より見渡す所に

断じて他の土地に見ゆるの
瀬戸内は他の土地に見ゆるの

断じて他の土地に見ること能はざる、潤明和暢なる瀬戸内の風

風景の特色

風景の特色

はある也、しみとと底に浸み込むが如き味ある風景、見てもく盡さざる含蓄ある風景、美しく優しく感深く趣多き風景、魂を吸ひ取る如き風景、心を搔亂す如き風景、人をして樂みと共に哀みを感せしむる風景也、要するに

瀬戸内の特色は、天然人爲相俟つて、風景を組織する所の材料の潤澤豊富なる

に在りとなす、材料豊富なるを以て、それ等を組織して成りたる風景も亦潤澤豊富なる也、千里荒涼として空山曠野の寒潮と連なる、枯瘦貧寒なる風景も亦可ならずとせずして、其俗受せざる所に價値を認むべきが、斯る、俗受非俗受共にする所の、潤澤豊富なる萬人向の風景も亦決して悪しとせざる也、是れ

單に快樂を與ふる風景にあらす、亦單に悲哀を與ふる風景にあらす、快樂を與ふると共に亦悲哀を與ふる風景也、同時に快樂

の悲感を興へ、悲哀の快感を興ふる風景也

而も、單に俗受のみの風景は厭ふべく、全く俗受のせざる風景も亦單に所謂酢豆腐の部類にして、最上のもものと云ふべからず、審美眼ある者も之を賞し、一般多數の人も亦之に打たる、風景にして、始めて最上の風景と稱せらるゝを得べし。

其八 瀬戸内海觀(二)

既に瀬戸内の風景の大要を説き了りたれば、約束に隨ひ、瀬戸内の島嶼中より選擇せられたる双美にして、眺め渡すべき瀬戸内に於ての特に就いて見るべきものなる小豆島と巖島とを問題となさんとす。

小豆島は、讃岐に屬せる一巨島にして、其規模瀬戸内の第一に位し、最も天然の風景に富めるを以て稱せらる、島内村邑少なからず、就中、西端の土庄町とつじまは小豆郡役所のある所にして此島の首腦となす、

日本の正木
の奇なる風
なも景

大阪、神戸、高松、岡山等より、汽船の便ありて至ることを得べし、島の最高所を星ヶ城山と呼び、之に連なれる一山、巖石の奇を以て勝れるものを神馳かみとなす、是れ、漢詩人に寒霞溪の文字を擬せられたる所にして、小豆島が風景を以て名を成せるはこれあるが故也。

神馳の勝景の概略を記さんに、奇巖怪石重疊として山の形體を作り、巖頭の樹は皆松にして、巖際の木は殆んどすべて楓に、其間清澄玉の如き澗水を走らし、或は懸つて瀧をなし、或は滯つて淵をなすに在り、即ち、怪奇を以て人目を驚かすの風景にして、淡中に深味ありて味ふれども盡きすと云ふの類にあらざる也。

即ち日本の風景の中に於て、其正なるものに屬せずして其奇なるものに屬する

也、但し、徒らに奇に失して人をして美感を催さしむる含蓄無きそれとは異なり、其奇適度にして、而も、神馳の特色は、人をして之に對して清き感とを起さしむるに在り。

奇にして清なるもの

是れ神馳の神馳たる所以也。

されど、小豆島は或る一部の者の云ふが如き左程日本に一二を争ふ絶景にあらず、日本の風景の中其奇なる部類のみに就いて見るもなほ神馳に優るもの少なからずとなす、たゞ

風景としての實價以上に神馳の尊ぶべき所以は、日本の風景として[△]の正なるもの[△]、極致なる瀬戸内に[△]、恰も[△]、萬緑叢中紅一點[△]の趣をなして、其奇なるものを添ふる

に在り、純日本の風景の頂上、即ち、日本の風景としての正なるもの、極致なる、瀬戸内を鑑賞し了りて後、更に、小豆島に上りて神馳の奇を探れば、其奇なるもの著るしく眼に映すると共に、顧みて、益々瀬戸内の特色が明確に意識せらるゝ也。

次に嚴島は如何。

此書は案内記にあらず、且つ、此書の讀者にして、嚴島即ち宮島

以上の風景と神馳の以し得べき點の向上

は如何なる所なるかを、手に聞いて始めて知るが如き人は無かるべきを信ず、故に、直ちに風景としての嚴島の批評に着手せん。
嚴島は、松島、天の橋立と併せて日本三景と稱せられ、普通一般の人の之を訪ふこと、遙に小豆島より盛なるもの也、然るに、所謂三景の中、天の橋立は箱庭的小景にして、松島は俗受けの部なるに、此嚴島に至りては、箱庭的小景に俗受けを兼ねて、随分厭やなるもの也、されど

流石は瀬戸内の好位置を占めたる島なれば、其時其日の氣象の加減に依りては、織巧なる人工的のもの皆自然と共に化せられて、得も云はれぬ特殊の美景

を成さざるにあらず、此に於て、何れの時ぞ最も宜しきと問ふに、普通には紅葉の頃を好しとするが如し、其故は、紅葉谷と云ふ所あり、且つ、神社に附屬して人に馴れたる鹿多きを以て也、されど、是れ紅葉に鹿て俗的聯想より來りたる卑見にして、紅葉清澗を挾

島は時と化せと

俗的

俗的

む風景は何れに行きてもあり、肯て嚴島のみの特徴にあらざる也、否、嚴島の紅葉谷などより幾倍も好き所は多くある也、加之、奥山の自然の風景の中に野生の鹿が現はれ出でたるならば、之を詩的にも云ひ得べけれ、伺ひ馴らして羊の如くなしたる鹿にては物にならぬ也、然らば、八月十五夜か、九月十三夜の明月には如何にと云ふに、爾り、これは確に紅葉の頃に優れり、ひた／＼と打寄する満潮に、有名なる大華表は金波銀波の中に立ち、酒を載せ妓を載せたる船は自在に其下を通過す、神社は舞臺廻廊皆海中より湧出したるが如く、萬點の燈光水に落ちて其數を倍し、龍宮城も管ならぬ光景、これぞ是れ、嚴島の蘊蓄が發揮し盡くされたる時なるが如し、されど、畢竟するに是も亦俗的趣味に過ぎざるのみ。

一體、嚴島の周回七里三十二町にして、其頂部たる彌山の高さは一千三百六十五尺と云へば、可なりの大きさと高さとを有する島なるに、其大ささ高さの割に、對岸の陸地との距離餘りに近きに失し、

神社及び市街のある所は餘りに狭きに失し、一口に云へば、コセ／＼して餘裕の無き景色なるが遺憾なる也、剩つさへ、之に種々の人工を施したるを以て、如何に最負目に見ても箱庭的なるを免れずとなす。

されど、幸にして春の曙と春の霽とあり、自然は此島の缺點を掩蔽して、之をして美觀を發揮せしむ、开は

此島に限りたる特殊の佳景

にてある也。

乞ふ之を述べん、嚴島には元來櫻樹多し、これも人に栽培せられしものにして、自然に在るにあらずと雖も、此島と櫻花とは極めて好く調和せり、左無きだに蒸發盛んなる瀬戸内の海は、晩春櫻花の候に至りて、淡き七色の霧に空氣を彩る也、此時に當りて、ほの／＼と明け渡る嚴島の曙は如何に、海は微温湯を湛えたる上に一面の練絹を掩へるが如く、吐き出す白氣に對岸の陸地の腰より下を撫で消

嚴島に特殊なる春の曙

し、更に島を煮柔げられたる玉の如くなせり、萬種の色彩すべて濃く強きは無く、彌山は遠く退いて、前に薄紗の帳を垂れ、堂塔樓臺及び碇泊船、皆有無彷彿の境に在りて、樹木の緑も皆一樣に薄るゝ中に、唯だ、一簇又一簇の櫻花のみは、微茫として浮き出だしたる如く白く見ゆる也、なほ、姿態の異なるに依りて、おぼろげながら少しく他の木より際立ちて見ゆる松が、淡墨に藍を帯ばしめたる色を以て櫻花に趣を添ふ、これは

山●中●の●春●の●曙●にも●あ●ら●ず、野●邊●の●春●の●曙●にも●あ●ら●ず、湖●畔●若●し●く●は●河●岸●の●そ●れ●にも●あ●ら●ず、又●海●濱●の●そ●れ●にも●あ●ら●ず

島にして、而も陸地を距ること遠からず、而も割合に高き山を有し、而も堂塔樓臺の莊嚴にして雅致あるものを有し、而も船舶の碇繫に適する港灣を有し、而も樹木と水分とに富み、而も特に櫻花に富む所の嚴島に限りたる春の曙也。

嚴島に特殊なる春の曙

海も山も案に暮れて、深々と物の奥より窺ふが如き覺束無き臘月

に世界を護れる、嚴島の春の曙は又格別也、海は一日吸ひ込みたる春の日の温みを、息する如くに吐き出して、己れも睡るべく、且つ入をも睡らしむべく、情味を含みたる叫びをなし、對岸の陸地は早や夢に入りたる如くに薄らぎて、島のすべての物は、一つ宛別々に濃き臙に包まれ、櫻には櫻の臙あり、松には松の臙あり、堂には堂の臙あり、塔には塔の臙あり、樓には樓の臙あり、華表には華表の臙あり、船には船の臙あり、人には人の臙あり、鹿には鹿の臙あり、大觀すれば、山には山の臙あり、浦には浦の臙あり、岬角には岬角の臙あり、丘陵には丘陵の臙ありて、細視すれば、同じ火にても、船の灯、神前の篝火、社殿の燈火、民家の灯、酒樓客舎の灯等、それ

れ、別々の臙を示す也、而も
 艶●麗●無●比●な●る●實●體●を、限●り●無●き●古●趣●古●味●に●て●光●澤●消●し●た●る●上●
 千●年●の●蛟●龍●が●吐●き●出●だ●す●如●き●陰●凄●靈●惟●な●る●氣●を●含●ま●し●む●る

が、嚴島に限りたる特殊なる春の曙の趣致にてある也。

之を要するに、嚴島の風景も亦水蒸氣の適度なる配合を得て、始めて成就せらるゝ也

たとへば、瀬戸内の風景は椀中の汁の吸ふべきが如くなるに、小豆島と嚴島とは、汁の中の實の特に咀嚼すべきに似たり、而も、實を食うて而して後に汁を吸ふべからずして、汁を吸うて而して後に實を食ふべき也。

其九 更に一步を進めん

湖沼觀の日本、即ち、湖沼觀の中に日本を溶和せしめての風景は、既に之を説き了りたり。

否、未だ之を説き了りたるにあらず、却つて其最も重要な部分を閑却せり。されど肯て之を忘れたるにあらず、別に章を設けて之を問題となすべく、暫く之を珍重に保留したる也。

乞ふ、更に一步を進めん。

◎日本一の好景風——山嶽美と海

洋美との一致

其一 日本の山嶽美と海洋美

日本は海國也、日本人は海國民也、故に、國家國民の必要として海を尙ばざるべからざるのみならず、亦

眞個に海を愛する心を養はざるべからざる

也、爾り、海は尙ふべく海は愛すべし、日本人にして、徒らに山を尙ひ山を愛することのみを知りて、海を等閑に附する者は、是れ國民の資格に於て不十分なる者也、日本に於ての獎勵すべきものは、登山の風にあらずして寧ろ航海の風なりとす。

されど、以上は風景上の問題にあらず、風景としては、日本に於

て由重んずべきか海重んずべきかと云ふこと、自ら是れ別問題也。

乞ふ其輕重を比較せん。

日本の山嶽

日本は元來山嶽美に富めり、殊に富士山の如きは

或意味に於て世界無比の名山

と云ふべき價值あり、其他

日本アルプス

と呼ばれて、本州の中部にアラナナの鎖を置きたるが如き秀拔なる山嶽の連結を見る、實に、日本は其面積の狭き割には山嶽に富み、而も、高峻にして姿態の秀でたる山多し、一々之を觀望し、且つ攀登して各別の風景趣致を鑑賞すべき也。

日本の海洋

而も、日本の海洋美に於ける方面は如何にと云ふに、固より、茫茫たる大海の水平線上に一物を見ざるは風景をなさずして、風景觀よりせるの海洋は、岸頭或は島嶼の布置と相俟つべく、殊に、湖沼の如き趣致を帯べる海灣及び内海を以て其最上なるものとなすべき

が、日本に於ては

風景を組織する所の要素が水蒸氣の作用と相俟つべく適度に、

同時に、水蒸氣の分量が風景に作用すべく適度

なる結果の美、即ち

風景として美の極なるもの

をば、最も其或部分の海灣及び内海に見るべきを以て、海洋の一端たる海灣及び内海の美、即ち、大別すれば海洋に屬するの美を以て

日本の風景に於て最も尙ふべきもの

となさざるを得ざる也

されど、此の如き抽象的なる議論は、何れを尙何れを勝と定むべ

からずして、人の好惡に依り、山を取る者も海を取る者もあるべく、

之を放置すれば何所迄も水掛論にして、之を判定するも、結局、山

嶽美、海洋美共に取るべくして、何れを何れと輕重すべからずと云

ふの仲裁説に歸するの外無し、海國民として、山をのみ愛して海を

風景の極となる

日本に於ての最も

愛せざるは怪しからぬと肩胛を張りたりとて詮方無き也。

此に於て、實際日本にての

最上の風景

と認むべき地は何れなるか、而して、其地は山なるか海なるかと尋究して、其争ひを決するの一途あるのみ。

こゝに至れば議論は明白也、所謂日本三景にもあらねば、日光にもあらず、箱根にもあらず、京都にもあらず、奈良にもあらずして日本に於ける最上の風景は、かの紫籠むる瀬戸内の多島海を推すべきこと、獨り日本の人の公評なるのみならず、亦世界の人の公評

なりとす、而も、瀬戸内は山嶽に屬せずして海洋に屬するものなること云ふ迄も無し、なほ、日本に於ては

エホハの道は旋風に在り、雲は其足の塵也

と云ふが如き廣野の大景

孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流

と云ふが如き大河の壯觀に接すること能はずと雖も、雄大にして且つ美麗に、雄大の度と美麗の度と共に絶頂にして、他に類無きのみならず、雄大美麗共に度を同じくして、毫厘の過不及無き風景はあり、开は

相州に於ける、三崎の歌舞島、葉山の長者ヶ崎、七里ヶ濱の或る高所等より望みたる、相模灣の大景

にして、就中

歌舞島

を最も優れりとなす。

此所の風景は、右には伊豆の突角遠く出で、左は房州洲ノ崎の鼻頭長く延びて、左右より眼界一面の海を包擁し、而も、其双手の端の相合すること能はざる断之間には、雲か山かと擬ふ噴煙を帯べる大島を置きて、風景の連絡をなし

大観すれば宛乎たる湖中の趣

にて、大山、箱根、天城より、大島を掛け、鋸山、鹿野山に連り、恰も此大湖を圍繞せる一山脈の觀あり、之に富士山の半天より下瞰して、湖中の風景に大交渉をなすを加ふ、此概觀は前にも既に述べし所なるが、回遊して以て其全體を歴觀したる上に價值を定むべき風景にあらすして、一所より之を眺め盡くすべき風景としては

瀬戸内より相州海岸は一段美の度高し。

即ち、瀬戸内の量に於て優るに對して、相州海岸は度に於て優り、兩々特長ありて相軒輕す可らずと雖、一目に見渡すべき風景としては、相州海岸の或る部分を立脚點としての眺望寧ろ瀬戸内に優る也。此に於て予は

相州海岸の或る部分を立脚點としての眺望に日本一の風景ありと斷言するに躊躇せず。

斯くて日本に於ける最上の風景なる雨地の、山嶽に屬せずして海

日本一の風

日本に於て
山嶽に優る
海洋美は

洋に屬するものなるを以て

日本に於ては、山嶽美よりも海洋美を優れりとなす

べきこと明らか也、而も、相州海岸の或る部分を立脚點としての眺望を價值あらしむる重要素は富士山にして、相州海岸、就中三浦半島の極端より、大山、箱根、天城を掛けての、波濤の如くなる連山の上に抽んでつゝ、海灣の彼方に卓立するを望むの富士は、遠からず、近からずして適度の觀を呈し、隨つて、最も富士としての美觀を發揮する也、即ち、相州海岸の或る部分の風景は

海洋美に兼ぬるに山嶽美

を以てするものにして、海洋美は主に、山嶽美は從に、海洋美に添ふるに山嶽美を以てするもの也、而も、日本の風景は此の如く

海洋を主として山嶽を從となす

の點に價值を認むべく、海洋は山嶽の補助を得て始めて十分に其美を成し、山嶽も亦海洋に添加せらるゝ物たる點に於て最も其美を示

海洋美と
山嶽との
關係に於ける
日本

す也、一步を進めて云へば
 山嶽美を以て世界第一に居る富士山を、其附屬物となす點に於
 て、相州海岸の或部分の風景は日本一
 に居る也。

但し、此所の風景は純日本的の極なるだけそれだけ水蒸氣の作用
 より影響を受くること著るしく、水蒸氣の作用十分ならざる時は、
 風景としても亦十分の美を成すこと能はざるものと知るべし、殊に、
 伊豆、安房の兩端及び大島、之に加ふるに大山、箱根、天城の展望
 を以てしたる上、富士を以て風景を總括するの要部となすなれば、
 雨天或は曇天にて、是等の物すべて形を隠す時には、相州海岸の價
 値は云ふに足らざるものとなるべく、なほ、伊豆、安房の兩端及び
 大島、之に加ふるに大山、箱根、天城を以てするの眺望はありとも、
 若し、富士にして雲霧に蔽ひ去られて風景に交渉をなさいらんか、
 相州海岸の價值は半ば以上を減せられて、非常に重きを置くに足ら

ざるものとならん、之を要するに
 相州海岸の風景は、富士山の全部を望み得べく、空の晴れたる
 日にあらざれば整はざるもの
 となす也。

其二 日本一の好景に接しての感想

或は、伊豆の熱海の後方なる十國峠を以て日本一の好風景となす
 者あり、爾り、或意味に於ては、之を以て確に日本一となすべし、
 依つて、試みに其勝概を擧げん。

地は熱海町の内伊豆山村に屬し、名は日金山なるが、熱海より之
 を越ゆべき路は、半ばより二條に分れて、三島に降るを熱海峠と云
 ひ、箱根に向ふを十國峠と呼ぶ、共に、頂上には眼界を測る樹木無
 く、登り盡くせば、忽然として世界を超越するの感あり、特に十國
 峠は一段高く、十州の山河と五島の煙波とを双眸に收め得るを以て

此名ある也。

一八四

此に於て、先づ、予が十國峠に登りし経験を語らざるべからず。或る年の夏の末なりき、晴れたる朝に熱海を發して、脚絆草鞋に固めたる足軽く、路を熱海町の内なる上宿に取り、杜鵑の名所と聞こえたる北來の宮の東を過ぎて、緩く登ること十町許、四面塔に至る、僧眞然なる者の住みし所と云ふ、右折して登ること十一町に至れば、果隣大徳の創立にかゝる地藏堂あり、これより日金地藏堂に至る迄、屈曲幾段の路は四十町、漸次に我が位置の高くなり行くを覺ゆと雖も、單調又單調、殆んど人を倦殺せんとす、されど、日本一の名ある眺望を領する前の單調は、喜ぶべき單調ならざるを得ず。既にして日金地藏堂に至り、これより八町の路を一氣に頂上迄攀ぢ登る、頂上は即ち十國峠也、一段高さ、丸山と呼べる、地點に立てられたる碑文を讀んで、其何故に十國峠と稱せらるゝかの理由を知り得べし、曰く、「伊豆國加茂郡日金山頂觀望者十國五島、自子至

卯、相摸國、武藏國、安房國、上總國、下總國、自辰至申、其國所隸之五島及遠江國、自酉至亥、駿河國、信濃國、甲斐國、天明三年東都林居士諸島出雲光英源清侯等應熱海里長渡邊房求之需建之」と、但し、これにて、見れば、國の數九なるが如しと雖も、伊豆國それ自身を加へて十となる也。

實に、此十國峠の眺望は、十方開轄物の遮る無きに、海は萬里際涯を知らざる太平洋を控へ、山は扶桑第一の芙蓉峰を負ひ、而も双方の廣さと高さとを領すべく、適度の距離と高度とを保てる點に於て、之に過ぐるの所あらずとなす、總じて、高さ山を高く見んには、それと或る程度の距離ある、或る程度の高地を立場となさざるべからず、而して、富士山に對する十國峠は恰も其注文に叶へり、加之、此所より眺むる富士は、三保ノ松原、田子の浦等を裾模様となしての足の爪先より、直ちに天空を衝いて周圍に物あるを許さざる頭のギリ／＼に至る迄、全幅を露呈して毫末も蔽はるゝ所無きを以て優

一八五

眺しも突
富士たるらも
裸け威
體出點

れりとなす也。尤も

十國峠より眺望する富士は、全く美化されたる富士にならざるやも知れず、されど、其美點も醜點も残らずサラケ出したる裸體的富士

なるを認むべし、人に迫るの氣と人を歴するの勢とある也、箱根足柄の群峰は皆趨つて其膝下に俯し、甲斐信濃の諸高山は盡く退いて其肩頭に半面を並べつゝあり、若し夫れ、雨降、秩父よりして、三浦半島及び房總の諸山に至れば、威靈に一喝せられて走り且つ偃れつゝ、あるの觀を呈する也、更に海上の方面に至つては駿河灣を右にし、相摸洋を左にして、右は細視すべく、左は大觀すべく、兩様の美兼ね備はれり、白蛇を横たはらしむるが如しと云ふ陳腐なる形容詞の最も適切なるを覺ゆる富士川より、清見潟、田子ノ浦のはとりに群る、漁舟、三島、沼津、原、吉原の人家、さては三保の松原の松の數に至る迄、一々指點すべき程細かに味はゝるゝは右方にて、

十木一國
すの時
理眺を
由望日

初島大島、利島、新島、神津島等の中に含みての、海上の大觀に他くは左傍也、實朝が所謂沖ノ小島に波寄する美觀も、箱根路よりは此所より望むを優れりとなす也。

總括して云へば、富士を頭のギリ／＼より足の爪先に至る迄殘り無く見渡したる上に、之を中心として展開する所の山海の眺望は日本に於ける無上の大觀なるを以て、十國峠を日本一の眺望となす

也、他に如何なる好景の地あり共、其眺望の優れる點に於ては、斷じて之に匹敵し得べからざる也、富士の頂上よりするの眺望とて其眼界の廣濶に、人の志氣を清高ならしむる點に於てこそ優れ、風景としては却つて適度を失ひ、殊に、富士それ自身の秀姿を見ること能はざるを以て、到底、十國峠の眺望の對比にあらずとなす。

されど、こゝに區別せざるべからざるは眺望の優れると風景の好きとは、自ら別問題にして